# 第15回「文芸思潮」エッセイ賞発表

二〇二〇年度第15回「文芸思潮」エッセイ賞は、二七七篇という多数の御応募をいただきました。厚く御礼申し上げます。今回も十代から九十代まで幅広い世代から寄せられると同時に、地域的にもヨーロッパ、東南アジアなどから広く御応募いただきました。それぞれの貴重な体験だけでなく、歴史として重要な記録や、社会への鋭い批評や問いかけも多く寄せられ、現代に生きる人々の姿が反映された豊かな内容でした。

例年の通り、まず選考委員会予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、その中からさらに最終選考作品が選ばれ、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって七月三十一日最終選考会が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀作および優秀作を発表させていただきますが、以後奨励賞作品も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

また明年も同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って力作エッセイを御応募ください。お待ちしております。

## 「文芸思潮」エッセイ賞

### 最優秀賞

**「そば打ちにハマる高校生」**
石田真一（大阪府堺市）

**「ビオラ」**
メーシリング順子（フランス・リヨン県）





### 優秀賞

**「珈琲店の奇跡」** 東出菜代（東京都港区）
**「ビーバーの目」** 藪口莉那（静岡県静岡市）
**「息子の学生服」** 家森澄子（岡山県倉敷市）
**「じっちゃんとの追憶」** 髙槻勇治（京都府相楽郡）
**「べこ石の浜辺で」** 金田一淳（青森県三戸郡）
**「チキンライス」** 晋多可幸（京都府京都市）
**「私を待つ人」** 松田正弘（京都府京都市）
**「小さな発見　野菜の祖先と出会う旅」** 本間　浩（東京都府中市）

### 社会批評優秀賞

**「貯金これだけでよく平気だね」** 柴田節子（北海道帯広市）
**「移動の自由と喜びを求めて」** 藤野高明（大阪府大阪市）

### 奨励賞

「さよならモチの木」 藤崎良子（福岡県遠賀郡）
「『浅間山噴火大和讃』が繋ぐ鎌原の命」 村松佐保（群馬県吾妻郡）
「弔い上げ」 さとうゆきの（福岡県遠賀郡）
「破り捨てた招待状」 菱川町子（愛知県稲沢市）
「恩師への思い」 佐高　源（山梨県中巨摩郡）
「絵イコール人生」 宮尾美明（愛知県愛西市）
「終戦のころ」 神宮清志（神奈川県横浜市）
「夢を紡ぐ手」 森千恵子（福岡県福岡市）
「ジャイ子」 田中美晴（大阪府豊中市）
「立ち食いそばラブ」 杉山高志（島根県出雲市）
「雪の日のマジック」 藤野なつみ（兵庫県姫路市）
「あの子とその母、そして父」 中武　寛（宮崎県西都市）
「声」 牧野香織（兵庫県尼崎市）
「裏方三十年の轍」 森﨑律子（大阪府大阪市）
「脳腫瘍闘病記」 出雲文子（東京都墨田区）
「墓参」 西嶋雅博（福島県いわき市）
「私の戦中戦後　横須賀にて」 伊藤秋子（東京都町田市）
「心の橋」 松島さおり（神奈川県茅ヶ崎市）

（次ページに続く）

## 奨励賞

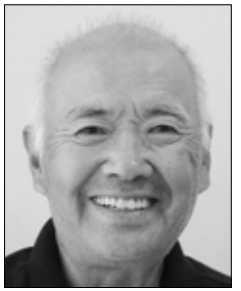
「ドとレとミの音がでない」河原梨香子（北海道北広島市）
「僕の十八年間」長谷川皓大（神奈川県横須賀市）
「山田耕筰とマニキュア」藤田陽子（神奈川県厚木市）
「大阿蘇の野焼き」上原翠子（熊本県熊本市）

## 社会批評奨励賞

「成年後見制度は法の下の虐待である」佐生綾子（東京都世田谷区）

# 選評

## 暮らしの中で共感する想いを



みずき　りょう
作家・劇作家・演出家
1942　北朝鮮生まれ
99　小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
2006　小説「お見合いツアー」で第49回農民文学賞受賞
戯曲も多数ある

### 水木　亮

今回エッセイ作品を読んで感じたのは、日本のシニアの文学愛好者や高齢者の趣味としての文章表現の場として、「文芸思潮」の存在はとても貴重だと思えることだ。

ここでは、庶民がその人生での感じた悲喜こもごもを、自分の言葉で表現し、たとえ文章としてはやや稚拙なところがあっても、言わんとするところを理解し、汲み取るフォローがある。そこがこの雑誌の大事なところである。

シニア向きの文芸雑誌と言えばそれまでだが、では「文芸思潮」のような文芸雑誌が日本にどのくらいあるか。それを考えればその健闘ぶりがわかる。

今回も高齢者が元気になれるような作品が多く見受けられた。また引きこもりや、精神を病んだ人にも少なからず元気を与えるような作品も見受けられて楽しかった。その意味でも「文芸思潮」の役割は大きい。

これからも、高齢者が元気になり、残りの人生を前向きに生きていけるような作品が多く寄せられることを期待している。「文芸思潮」はそれを応援している。

私の心に残った作品を優秀賞から紹介したい。

「珈琲店の奇跡」東出菜代は優秀賞の一席になった。このエッセイは気分が落ち込んでいた日、ある珈琲店に入った。そこで前の客からのプレゼントのハプニングがあった。「どんなに絶望していても五分後には人生ががらりと変わることがある」ことを信じた。「希望の光が見えないときも、曲がり角の先には海が見えるかも知れない」みんな悩みながら生きている。そんな人々に元気をくれる、最優秀賞に匹敵する素敵なエッセイである。

「貯金これだけでよく平気だね」柴田節子は、清掃員をしながら逞しく生きる姿が、正直に飾りなく描かれていて好ましいエッセイである。高齢化社会を生きるシニアの人々が共感する内容でよかった。

「チキンライス」晋多可幸はダンスホールで働く母子家庭の母親が、子供と死んだ話である。その母親が食べていた貧しい食事に寄せて、作者がどうしても書いておきたかった気持ちが伝わってくる秀作である。

「小さな発見　野菜の祖先と出会う旅」本間浩は、野菜の祖先を訪ねる記録で、野菜に関するいろいろな発見があり楽しい。その追求性が光っていた。

「べこ石の浜辺で」金田一淳は、少年の日に海に石を積み上げ、そこをポイントにして、さらに遠くまで潜れるようにした思い出を書いた。べこ石に寄せる思いが胸を打つ。

「私を待つ人」松田正弘は、障害のある子供の、友情を描いていて心が温かくなる。よい作品だ。

以下奨励賞の作品をみたい。

「浅間山噴火大和讃が繋ぐ鎌原の命」の村松佐保は、浅間山の噴火で犠牲になった人々を供養する「廻り念仏」について書いた。この歌の詠唱（歌詞が）がとても素晴らしい。「隣村有志の情けにて　妻亡き人の妻となり　主亡き人の主となり　細き煙を営みて」――生き残った村人が、今一度力を合わせて生きて行こうと、此の歌詞で歌うのである。専門家が作った歌詞ではない。名もない農民が考えた歌詞だから素晴らしいのである。それを発掘した意味でこのエッセイは気持ちが伝わる。歌の力でもある。

上原翠子「大阿蘇の野焼き」は阿蘇の野焼きに寄せて、交通事故で死んだ夫と息子の思い出を書いた。これも切ない。

「夢を紡ぐ手」の森千恵子は病気で聴覚障害になった作者が、落ち込むことなく手話ボランティアとして参加し、生きる力を得た経験を書いた。大切な実践である。手話ボランティア活動をしている男性の言葉、「手話は目で音を聞いてください。声は音のなかにあるのではなく、まなざしの中にもあるのですよ」この言葉は素晴らしいと思った。

「僕の一八年間」の長谷川皓大は発達障害にありながら、人との出会いで元気に生きる姿を書いた。希望をもって頑張って生きて欲しい。

杉山高志の「立ち食いそばラブ」は立ち食いそばをめぐる話で、文章もうまく楽しい。

その他、松島さゆりの「心の橋」は、出会った中国人女性などとのユニークな着眼がおもしろく、さいとうゆきの「弔い上げ」、宮永徹子の「人生最後は特上握り」も印象に残った。

## 佳作

「海色ノート」　中村郁恵
「さよならのリフレイン」　秋葉みのり
「ピジョン・ブラッド」　西本美彦
「フクロウとの生活」　Maddy
「牛の涙」　羽田　良
「事務室より」　岡隆一郎
「かにばば」　林勢津子
「旅愁」　近藤幹夫
「山小屋温泉」　瀧沢　鈴

藤崎良子の「さよならモチの木」はモチの木に寄せる愛情にあふれていて共感する。

佳作ではゴルビー長田の「百万本の鉛筆」は一本の鉛筆に自分の想いを託すことで、平和のありがたさ、戦争の愚かさを書いた。この世代の発言は大事なことである。

「砂漠に生きる」の朝生その子は、モンゴルの砂漠に植林する体験を書いた。自分も朝鮮の木浦に生まれたことで外国に関心があるのだろう。なかなか貴重な体験である。登場する人物も魅力がある。

その他にも印象に残る作品があった。都桜ナオミの「私の幸せは、大量のオスひよこの死骸の上に成り立っている」は、佳作だが内容は悪くない。着眼がユニークだ。入賞うんぬんにこだわらず、これからも精進して欲しい。

生きていて癒やされる、ほっとする。コロナもそうだが、この厳しい状況にあって、書くことは人の気持ちを整理し、いかに生きてゆくかを考えさせる。共に悩みながら、かけがえのない人生を書くことで、共感し合えることは人間だけの喜びである。文学不毛も言われる現代、人々にそんな味のある「文芸思潮」のエッセイコンクールであって欲しいと願う。

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・NTT プリンテック主催第１回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

## いい作品が目白押し

### 五十嵐勉

第十五回の「文芸思潮」エッセイ賞は昨年に引き続き全体の底がさらに上がっていることを感じた。三次予選を通過する作品が増え、どれもおもしろく、入選・佳作以上の層が驚くほど厚くなっている。いきおい、優秀賞・奨励賞の数も増えた。どれも落としにくく、結果的に大盤振る舞いのような結果になったが、作品の質は保証されている。

また最優秀賞のトップワンが、これも昨年と同様の傾向

「山崩れの経験」　南家久光
「百万本の鉛筆」　ゴルビー長田
「詩集制作」　有澤かおり
「電話」　藤木雅子
「無」　斉藤はな絵
「単身赴任」　今ちゃん
「惜別」　牧　康子
「癌のバカヤロー」　倉沢辰子
「送る人」　九条之子
「０という数字」　徳重三恵
「消えたガスの匂い」　河上美智子
「ドイツで、髪を切ってもらったら」湯谷大志
「瓶が教えてくれた夫婦のカタチ」結咲りと
「新聞紙然れど新聞カゴ」　平岡佐一郎
「沙漠に生きる」　朝生その子
「属する世界がない私」　鎌田かをり
「靴を揃える」　呉　由美
「油と鎌と冒険の三日間」　竹澤一晃
「祖母の背中」　武藤蓑子
「大晦日のナモミはぎ」　鹿久保知里
「寡黙な寿司屋の大将」　大宮新子
「霊魂」　anehako
「ケロリン日記」　古城美夜
「ヘリにて救助されるも、後の分断」佐藤悦弘
「年越しソバ」　われもこう
「３秒ルール」　安部としき

### 社会批評

「石の煙」　那須修一
「人生最後は特上握り」　宮永徹子
「カメさんと言われた生き方の先に」さおり
「人生百年時代」　林　須磨
「夢を追う覚悟」　小倉一純
「土地が下す運命」　横井純子
「祖母の眉」　アマナエイコ
「診察枕の草子　スイカ編」　日暮真由美
「虫とりと、おじいさんと」　宮下さつき
「場の発達障害」　長井　潔
「私の幸せは、大量のオスひよこの死骸の上に成り立っている」　都桜ナオミ
「米国ケンタッキー州でのほのぼの出産」谷美智彦
「多喜さんのこと」　坂口保典
「父」　鎌田　誠
「今　私のできる事」　金井つね子
「恨みが愛に変わる」　ことり
「紋切型言葉というディストピア」宮崎啓吾
「われらの紀元二千六百年」　梶川洋一郎
「教育灰書」　午後山木一朗
「スマスマはパンドラの箱を開けた」須磨貴美子
「安けりゃいい」　村岡雄一郎
「失われる日本らしさ」　久保　浩
「ブレーキテスト」　合原和晴
「今宵はひたすら人類の未来について思いを馳せる」　蝶野うらら

## 入選

「亀」　田中浩司
「国境」　松原泰子
「スターライトパレード」　酒井恵三
「好きの記憶」　松本侑子
「けっぱり先生と私」　山水文絵
「認知症の真実」　森　由美
「呻き」　七羽鳩子
「パラリンピックを国連障害者憲章の視点で考える」　徳安利之
「大学病院の外来」　鈴木幸子
「シチロベエさんの作戦」　植田郁子
「父の最後の思い」　竹園レイラ
「私の思う先に」　荒木景子
「思いがけない入院」　野宮健司
「心を見つめ直して」　土田菜呼
「感謝のワンカップ」　青柳みすず
「星形成論にのめりこんで」　前岡光明
「喜寿の免許皆伝」　小島恒夫
「鍵穴・サルボボ・タニト」　今井　満
「ああ、彰義隊」　水沢小三郎
「床上浸水」　松山はな
「看護師が全て」　紙屋里子
「戦没者遺児が考える太平洋戦争」　川口正浩
「振り袖物語」　三宅直子
「恋」　小糸ゆき
「人間五十年」　比戸　圭
「さよならゆうれい」　鷲田ヨウ
「ようこそ地球村『雑草園』に」　重松博昭
「私は大丈夫だから」　内久美子
「始まりの月曜日」　宮川星華
「仁吉の背中」　山田まさ子
「幻の約束」　今西　梓
「『障害者』を作るのは誰か」　深谷満彦
「トマト」　暁夏
「それはそれで良い」　吉田宏子
「息子への感謝状」　白楊風子
「ひとすじの光」　山崎ひとみ





が見られ、四人の選考委員の推すものが異なり、一致点を見つけるのに難航した。二作を当選とすることで、なんとか治まったというのが実状である。

それでも、最優秀賞の輝きは、広く社会に読んでほしいまばゆい光を放っている。石田真一氏の「そば打ちにハマる高校生」は、学校で思いがけなく課題研究として始めてみた「そば打ち」が生徒たちに思いのほか受けて、飛躍的な広がりを実現していく話である。ここには、何でもきれいに提供されてシステムの流れに乗って動かされていく現代社会や教育体制に対して抗する声がある。青少年たちが自ら食べ物を作って味わっていくという、原初的な達成感と充実感がある。鉛筆さえナイフで削ることができず、物を作る実感から遠ざけられつつある青少年たちに、作って食べる基本的な実感を呼び起こすことができた実例が、ここには輝いている。この「手で作る喜び」は彼らのこれからの人生に、単純で重要な基軸を与え、大きな支えになっていくだろう。この作品にある爽快感は、根本的なものを見直し、ある重要な単純さを覚醒させるところに根ざしている。読み終わって、痛快感が残る作品である。

もう一つの最優秀作品「ビオラ」は、フランスに在住するビオラ奏者の人生の軌跡を映したものである。メーシリング順子氏の半生は起伏に富み、ビオラという楽器を通して、様々な人間模様が複奏して奏でられる。夢と挫折と希望と思いがビオラの豊かな音色に溶け合って、独特の深みのある旋律となって流れているところに、人生の味が表出されている。Aというビオラを作る職人の人生と死もよく伴奏として生きていて、陰影を深くしている。生き方が意義深い存在として重みのある光を放ち、言い尽くせない妙味がある。

優秀賞もいい作品が目白押しだった。藪口（やぶくち）莉那（まりな）氏の「ビーバーの目」は会社勤めの中で鬱積し圧迫されて陥った鬱状態の危機から、カナダ旅行の広告の中にあったビーバーの目に魅かれ、実際にカナダの自然を訪ね、森林の中で最後の瞬間にビーバーに遭遇し、視線を交わす話である。その眼差しの中に、生きる自然の本質を共感して快癒する結末には、魂を揺さぶられる感動があった。現代に生きることのキーになるテーマがここには宿っている。

家森（やもり）澄子氏の「息子の学生服」も、親友の突然の死の嘆きを、相手の学生服を着続けることによって、その深い絆を存続させ、友愛の姿を青春のエネルギーとして顕現した貫きは、大きく胸を抉ってくる。美しいものに触れさせてもらった。

松田正弘氏の「私を待つ人」は、発達障害児の心の支え合いによって、運動会の五〇メートル走をなんとか完走する話で、心の繋がりがいかに大きな力を生むか、人間の原動力の基点を想わせる感動がある。

高槻勇治氏の「じっちゃんとの追憶」は、被爆第三世代の体験引き継ぎを記した作品である。「じっちゃん」の直截（ちょくせつ）な物言いが、原爆の凄さを伝えていて、語り継がねばならない被爆の実相を部分的にも宿している。おろそかにできないものがあり、現代が抱える潜在的な危機を呼び起こすためにも、注視すべきものを含んでいる。

晋多可幸（しんたかゆき）氏の「チキンライス」は、ダンスホールを営む

「僕」の家で働き始めた女性が母子心中をする話だが、そのとき初対面で会った際、食べていたチキンライスが印象に残り自分もデパートでチキンライスを注文したことが、不思議な運命の糸を感じさせる作品に仕上がっている。重いものの残るエッセイである。

金田一淳氏は最優秀賞・優秀賞などキャリアの長い書き手で、いつもいい作品を寄せてくるが、今回も充実した筆力で子供時代の海岸の光景を、数十年後の再訪のシーンと重ねて、生動させている。手堅い、確かな筆致は氏の実力を発揮していて、失われた世界の輝きを命の意味の上に乗せて、固定し永遠化することに成功している。懐かしさがきらめいている作品だ。

社会批評賞優秀賞の藤野高明氏の「移動の自由と喜びを求めて」は、全盲男性のホーム転落事故を扱っていて、著者本人が三度、ホーム転落事故を経験している。九死に一生を経た体験からの告発だけに、痛切な説得力をもって迫ってくる。多くの人に読んでほしい貴重な内容である。

奨励賞も心に残る作品が多数あった。「さよならモチの木」（藤崎良子）は、一家の盛衰がモチの木とともにあり、父母の死や跡継ぎによる家の建替えによって枯れ伐られていく過程は命の姿として心を揺さぶってくる深い感慨がある。「絵イコール人生」（宮尾美明）は以前の優秀賞作品の犬の話の続編で、その犬が死んだ心の深い痛手からどう立ち直るか、迫ってくるものがあった。

続編として意義深いものに「大阿蘇の野焼き」（上原翠子）がある。交通事故で同時に失った夫と息子の幻影を負って、阿蘇の野焼きの炎の中に、その命の再生を願う気持ちが燃え上がるシーンは胸を打ってくる。

「夢を紡ぐ手」（森千恵子）は老齢での耳の病の変化を手話という新たな世界の開拓によって乗り越える話で、通じ合うことの癒しを含めて心が暖められる作品である。

「あの子とその母、そして父」（中武寛）は、私個人としては優秀賞でもよかった深いエッセイで、病に喘ぐ愛児を背負って山道を急ぐ母親の姿は、命を繋ごうとする母性の気高い姿を読者の胸に永遠に残してくれる。私の胸に深く刻印された一作だった。しっかり受け留めたい。

「『浅間山噴火大和讃』が繋ぐ鎌原の命」（村松佐保）は、古い記録をよく掘り起こした素材への眼がいい。この和讃は価値が高く、噴火を現在に近く置く意志は重要なことである。和讃全体を本文中にどうやって見せるか、もう一つ工夫があればさらに迫ったエッセイになっただろう。

「裏方三十年の轍」（森﨑律子）は、あまり陽の当たらない文楽の裏方の世界をよく掘り下げていて、密度の濃いレポートになっている。森﨑氏はレポートの手腕は卓越していて、それぞれの世界への切り込みは一つの才能を感じさせる。今後もこういう積極的なアプローチを期待したい。





「脳腫瘍闘病記」（出雲文子）の痛々しい闘病エッセイは、このような苛酷な運命に置かれた一個の人間の姿を赤裸々に呈示している。苦難への問いかけと叫びは痛切に届いてきた。熾烈な闘いから匂ってくる火花は根源の深い領域に達していた。

「墓参」は西嶋雅博氏にとっては、書き残さねばならない必然性のあるものだったろう。母と満州という運命を追って振り返るその旅路は、自身のルーツの原風景として永く残り、それは歴史に重ねられた痛みを伴って刻印されるものだろう。しっかり胸に残った。

「山田耕筰とマニキュア」（藤田陽子）は山田耕筰の晩年の生活を美容師として生き生きと描いていて、たいへん興味深かった。珍しい経験は、それだけで価値がある。筆もしっかりしていて、九〇歳の年齢を感じさせない捉え方も、快かった。

「成年後見制度は法の下の虐待である」（佐生綾子）は成年後見制度への鋭い批判で、現行の不備を鋭く突いている。改められる方向へ実際に進んでいくことを祈念する。

今回特筆すべきは、教育の領域に注目したい作品群があったことだ。奨励賞にも「破り捨てた招待状」（菱川町子）「恩師への思い」（佐高　源）、「ジャイ子」（田中美晴）の三作が入っているが、佳作にも「教育灰書」（午後山木一朗）があり、入選にも「けっぱり先生と私」（山水文絵）が入っている。これらは七〇年代の教育現場荒廃への振り返りも含んでいて、新しい視点で教師と生徒との関係を呈示してくるものだった。恩愛に象徴されるこれまでの深い姿に対し、荒廃によって反逆に曝され、傷つき迷う人間としての教師像は、問題の深さを示すと同時に、生身の教師像が浮かび上がってきた。

佳作にも「さよならのリフレイン」（秋葉みのり）「百万本の鉛筆」（ゴルビー長田）「旅愁」（近藤幹夫）「海色ノート」（中村郁恵）など秀でた作品があり、「ドイツで髪を切ってもらったら」（湯谷大志）「瓶が教えてくれた夫婦のカタチ」（結咲りと）「砂漠に生きる」（細川與美子）「事務室より」（高岡隆一郎）「ピジョン・ブラッド」（西本美彦）など載せたい作品もたくさんあった。「フクロウとの生活」（Maddy）などおもしろい素材だった。「われらの紀元二千六百年」（梶川洋一郎）も鋭い社会批評として記憶に残っている。「送る人」（九条之子）はいい題材だが、焦点の当て方をよくすればもっと光った作品になったことが惜しまれる。

「癌のバカヤロー」（倉沢辰子）「スマスマはパンドラの箱を開けた」（須磨貴美子）は異色作で大胆な表現が眼を引いた。「診察枕の草紙　スイカ編」（日暮真由美）「米国ケンタッキー州でのほのぼの出産」（谷美智彦）「人生百年時代」（林須磨）「場の発達障害」（長井潔）もいい

題材の輝きを有して記憶に残っている。

総じて今回も、それぞれの人生や運命の上に乗って、深い体験の世界を見せてもらった。それぞれの人が運命の苛酷さに堪え、苦闘を乗り越え、あるいは挫折して、輝きを得ている。一度きりの人生の輝きのうちのいくつかがここにある。それに意味を与え、それを共感し、共有していくことが、文学の大きな作用だろう。こういう形で深く広く共有できたことは、大きな喜びである。次回も期待したい。

みかみ　ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生れ
法政大学中退
1982「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

## 言葉に誘われていく

### 三神　弘

メーシリング順子「ビオラ」は、「原因不明の右手の震えのせいで、バイオリンが弾きづらくなってきた」音楽家が、「ビオラ」に出会い、転向し、「もっと豊かな低音を弾きたい」と、理想にかなう「ビオラ」を探し求めていく。そして出会った「ビオラ」は、友人達の推奨とはことなるものの、「何か暗い、反逆児的なくせに温かい、豊かな音」を響かせたという。

読み進めていくうちに、「ビオラ」が人格をもち、制作者を語りもし、奏者である「私」の記憶をよみがえらせもし、人生さえ暗示していく。いわば、「ビオラ」が主人公になっていく。作品づくりには方法と技術が必要だが、こうした試みに注目したい。

石田真一「そば打ちにハマる高校生」は、農業科高等学校における教師と生徒達の「そば打ち」の実践記録だ。「そば道場に通い、技術修得に努めた」教師が、「そば打ち、やれへんか」と呼び掛けたところ、思いがけなく生徒達が集ってきたという。集ってきたものの、道具がないから、これも自作することになり、「木の丸棒を紙やすりで磨き上げて麺棒」にするといった具合だ。

それからというもの「毎年春になると、そば打ちに興味をもつ生徒が入部を希望」するようになる。高齢者介護施設を訪問し「打ちたてのそばを試食してもらう」活動を展開するようにもなる。「国際そばシンポジウム」に出席したり、「そば打ち段位に挑戦し、多くの生徒が合格」するようにもなった。

読みどころはたくさんあって、伝統文化の継承や、体験





学習の重要性、地域のボランティア活動にいたるまで、話題もさまざまに提供されている。社会批評にもなっている。闘達で、伸びやかで、痛快な作品だ。生徒達の息遣い、筋肉の動きが伝わってくる。指導者である教師の「生徒達がなぜそば打ちにハマったのか、私にはわからなかった」は、読者に手渡すものが多い述懐だ。

藪口莉那「ビーバーの目」は、「目を開けると、黒と紺を幾重にも重ねた空と、月と星があった」とはじまり、異国の夜であることがわかり「天井にぽっかり開いた天窓から夜空を見上げ」る「私」が登場する。

作品を読むことは、筋立てや意味でもなく、ただ、言葉に誘われていくことだということがわかる。作品は「私」の日常生活を振り返り「太陽がのぼる前に目覚める夜が二年ほど続いていた」といい、その頃の日記が紹介されている。これも「私」の言葉であり、ここでは月と星もなくて「洞窟のなかに蝙蝠」が棲んでいる。

カナディアンロッキーへの旅の目的は「野生動物を見ることだった」とあり、「山中から」「動物の息遣いを感じ」たともいう。帰国が迫った日、もっとも出会いたかった「ビーバー」が「川面に浮かんだ」という。「私は走り出した。すると、相手もすいすいと水を切ってこちらに近付いてくる」「私と目があった」と、出会いを確かにする。

帰国後の今日の「私」も報告される。「彼は滑るように泳ぎ、私の元へやって来る。私をじっと見つめる」「その目を見ると、あの日と地続きのこの日常をもう少し生きてみよう」と、言葉を見つけていく。作品が、「野生」なるものに向けて言葉をさがす旅だったことがわかる。ビーバーの目について語るのは、こんどは読者の側になる。

菱川町子「破り捨てた招待状」は、教室が無法地帯となる「学校崩壊」のなかで、定年間近の女教師の奮闘振りが語られていく。孤立無援であり、これまでの経験が役に立たず、自信をなくしていく。「学級崩壊」というマスコミ用語が、具体的に描かれてもいく。読者には、女教師の相手というのは目の前の生徒ばかりでなく、教育制度や、父兄や、姿の見えない時代や社会にもあるのではないかと疑われてくる。

さて、歳月を経て「学校崩壊」のなかで手こずらせた卒業生から、成人式への招待状がくる。女教師の態度は「即座に破り捨てた」とある。この作品の評価すべきは、いわゆる恩師と卒業生の「美談」にしていないことだ。そこにこの女教師の教育者としての誇り、信念を垣間見ることができる。

蝶野うらら「今宵はひたすら人類の未来について思いを馳せる」は、「哺乳類の体細胞クローン、ドリー誕生を報じるテレビのニュースに釘付けになった」とはじまり、「創世記の天地創造をビミョーに信じて」いる「私」は「神

への冒涜じゃないの」と衝撃を受ける。作品のテーマは「人間の欲望は何処まで行くのか」と明らかで、論理的文章に直すことで簡単に要約することはできるが、この作品の読みどころは「私」に親しみと身近さがあり、語り口に魅力があることだ。大真面目な自問自答のあげくに、「わけがわからないままに」「今夜は一杯飲んで帰ろう」の気分にも、ユーモアがある。題名も気が利いていて、作者の余裕をうかがわせる。

佐高源「恩師への思い」は、古希を過ぎたある日、身の回りを整理していると眼鏡が出てくる。小学生のとき先生に買ってもらったもので、このことから、眼鏡をかけて鏡をのぞいたときのうれしかった顔などがよみがえってきて、眼鏡は、恩師への愛情を身近にする記念品となっていく。作品は、恩師から贈られた眼鏡をかけての「成長の記録」ともなっている。

宮永徹子「人生最後は特上握り」は、二十代の女性の一人旅だ。行き当たりばったりのスタイルであることから、読者は「私」の気ままさに同行し、「私」の語るままに、一緒に体験をするということになる。食費を節約する旅行であることから「最終泊の夕食は贅沢三昧をしよう」と決めている。やがて旅の終わりに寿司屋で念願の「特上握り」に至福のときを過ごすのだが、ここからもうひとつのドラマがはじまっていく。

つづき　たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文學界新人賞受賞
「狼を見る」（文芸思潮）「ご眷属様ジャーニー」（三田文學）他「長者屋敷の寝られぬ座敷」（合作）で佐々木喜善賞など　構成作家としても活動中

## コロナ禍のリモートではない短縮選考会

### 都築隆広

コロナ禍。ZOOM 会議やリモート飲み会にも、ようやく慣れた七月下旬の選考会は「リモートにはならんだろうなぁ」と予想はしていたが案の定、マスクを付けて机を離し、除菌したりとソーシャルディスタンスを意識し、二時間というタイムリミット付きで行われた。最優秀賞は全体的に評価が高かった「ビオラ」と五十嵐編集長と私が推していた「そば打ちにハマる高校生」となり、水木亮審査員が強く推薦した「珈琲店の奇跡」は惜しくも最優秀賞とはならなかったものの、優秀賞の筆頭におさまった。

高評価の「ビオラ」だが、最優秀賞になったのは意外でもあった。ビオラという楽器への作者の想いは描かれているものの、主題であるはずのビオラ職人のAさんとの交流





のドラマが薄いようにも感じた。優秀賞でもいいのではないか？　と個人的には思えたのだけれど、独特な落ち着いた雰囲気もあり、総合力で一位を射止める結果となった。同じく、最優秀賞の「そば打ち～」は語り手である高校教師が「そば打ち初段」を得て、高校生にそば打ちを教えるという冒頭から、サクセスストーリーの如く、物語がどんどんスケールアップして行くくだりが読ませる。とはいえ、社会批評賞になるだろうと踏んでもいた。最優秀賞となったときには「いいんすか？　そば打ちっすよ？」とサプライズ人事を思わされ、狐につままれたような心持ちとなった。

優秀賞の「珈琲店の奇跡」は最後の辺りで含蓄のある話に持って行った手腕は評価したい。とはいえ、今年のエッセイ賞を代表する作品と呼ぶには、小事件過ぎる。確かにこういった人生の喜びは稀にあり、執筆動機もわかる。けれども、皆が大なり小なり経験することで、「奇跡」はやはりいい過ぎだろう。「ニューヨーク東8番街の奇跡」とか「三十四丁目の奇蹟」とかジャッキー・チェンの「ミラクル／奇蹟」とか、タイトルに「奇跡」と付くとどうしても作品のハードルが上がってしまう。エッセイや小説の題名に付けることは個人的には推奨しない。

ところで毎年、推薦作が上位に食い込まないことにかけては定評のある私だ。都築に審査段階で推薦されたら最早、不吉といっても過言ではあるまい。今回の推しは優秀賞「チキンライス」と奨励賞の「山田耕筰とマニキュア」だった。「チキンライス」は、自宅がダンスホールだという設定がすでに素敵なので、題名が「ダンスホール」でも良かった気がする。しかし五十嵐編集長に「これは『チキンライス』じゃないと駄目ですよ」と断言されて、「で、ですよねぇ」と今年もつい忖度をしてしまった。「チキンライス」というと、我々の世代では松本人志が作詞して、浜田雅功と槇原敬之が歌ったヒット曲を連想する。こちらも貧乏な少年時代を歌ったもので、チキンライスが子供達にとって、外食の御馳走と貧乏料理の中間だった時代が確かにあり、昭和史の一頁だろう。現代だと喫茶店でチキンライスを食べるとケチャップにこだわっていたりして、逆に高くつく。チキンライスに憧れと親近感があった時代は遥か昔で、最後の三行にはほろりとさせられた。

「山田耕筰とマニキュア」は巨匠山田耕筰にマニキュアを塗ったことがあるという、貴重な体験記だ。しかし「有名人に頼って書かれたエッセイは良くない」という物言いがついて、あまり支持が得られなかった。音楽家は楽器を演奏するからマニキュアを塗る必要があったのか、単なる性癖か、山田耕筰がなぜ、マニキュアを塗っていたのかに関する説明があったらもっと良かったろう。これも活字にすべき貴重な経験である。

## エッセイ賞　選評

またまた水木選考員が執拗に推していたのは、優秀賞「貯金これだけでよく平気だね」。金持ちの胸糞な態度の悪さと、語り手の清掃員の素朴な人柄が対比となって、読者好感度もきっと高い作品だろう。ただ、金融庁の老後に二千万円必要問題に関して、それだけの金銭を必要としている人々が「そもそも欲張り過ぎている」と結論付ける部分には異論がある。芸人の中田敦彦が開設したYou Tubeチャンネル「YouTube大学」によると、その報告には「国民の金融リテラシーを高めさせ、投資を行わせ、個人で老後に備えさせる」という、裏の意図があるらしい。つまり「老後に二千万円が必要っていうのは、単に投資を開始せよって話ですぜ?」とYouTubeで聞き齧った知識で口を挟みたくなる。まず、NISA（少額投資非課税制度）より始めよ。……と一応の打開策を提言はしてみるも、現実問題、このエッセイに共感する人の方が、急にNISAを始める人よりは多いことだろう。他にも、優秀賞「小さな発見　野菜の祖先と出会う旅」「息子の学生服」、社会批評優秀賞「移動の自由と喜びを求めて」あたりも力作だったので推薦しておきたい。

　コロナ禍の時代、投稿されるエッセイも現代を意識させる題材が多かった。とはいえ、蓋を開けてみると、上位を占めたのはノスタルジーや人間愛を描いた作品群である。裏を返せば、過去への哀惜や人間愛を通して閉塞的な自粛社会を乗り切ろうという人々の想いが、エッセイという形で結実したのかも知れない。こんな時代だからこそ、過去を愛し、人を愛し、そば打ちもしてみたい。

選考会風景



# 第16回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

**文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。**

**文芸思潮エッセイ賞作品募集要項**

**主旨●**随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

**募集内容●**オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）。

**応募資格●**不問

**応募規定●** 4000字以内（極力パソコンA4用紙出力のこと。やむをえない手書きの場合はA4原稿用紙を使用する／B4は失格）。**※応募審査料1800円**を郵便為替で同封のこと。パソコン原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。別紙に①応募部門（**第16回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記**）②タイトル③本名およびペンネーム④性別・年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。⑨応募審査料1800円を郵便為替などで同封のこと（為替には無記入・無押印）。外国からは15USドルを同封。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。

**応募先●**〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社
「文芸思潮」エッセイ賞係
TEL03-5706-7847　FAX 03-5706-7848
E-mail　bungeisc@asiawave.co.jp

※恐縮ですが応募審査料1800円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

**賞●**エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名は7万円／3名は5万円）
優秀作■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）
奨励賞■賞状・賞メダル　佳作・入選■賞状・記念品

**選考委員●**三神弘・水木亮・都築隆広・五十嵐勉

**締切●** 2021年3月31日（当日消印有効）

**発表●**予選通過作品発表は2021年6月25日発売の「文芸思潮」80号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・最優秀作・優秀作は2021年9月25日発売の「文芸思潮」81号に発表掲載。奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

**主催●**文芸思潮

**※主催者から**　日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 最優秀賞

Essay

# そば打ちにハマる高校生

石田真一

両腕十本の指を用いて粉に水を万遍なく行き渡らせ、しっかりと体重をのせてこねて生地を完成させる。円形から四角へと形状を変化させながら徐々に生地を薄くのばした後、折りたたんだ生地を均一の幅で切れば、手打ちそばの完成である。

近年、そば打ちは中高年の方々の趣味の一つとして定着しつつある。定年後のセカンドライフを取り上げるテレビ番組を見ていると、〝老夫婦が里山でそば打ちを……〟のような特集をよく目にする。そば打ちに魅力を感じるのは、中高年の方々だけなのだろうか？　そんなことはない。私はそば打ちにハマっていった数多くの若者たちを知っている。これは、私が高校教師だった頃の実践記録である。

危険物取扱者、愛玩動物飼養管理士、食の検定、アロマテラピー検定……私は資格マニアではないが、自らのスキルアップのために様々な資格・検定試験に挑戦し続けてきた。私が取得した資格の一つに全麺協素人そば打ち段位がある。試験内容は、制限時間内に粉と水から手打ちそばを完成させるというものである。作業前の衛生チェックから作業終了後の後片付けまで細かく審査される。初段から五段までのランクがあり、上位試験になるほど粉の量が増え、そば粉の割合が多くなる。私がこの試験を知ったのは、二〇〇八年九月。自宅近くのそば道場に通い、技術習得に努めた。翌年、初段位試験に合格することができた。「オレ、そば打ち初段やで」と言うと、職場で、馴染みの居酒屋で、親類宅でドッと笑いが起こった。当時は「面白い資格を取れたもんやなぁ、いいネタができた」、それだけであった。

二〇〇一年四月に私は公立高等学校の教師として採用された。担当教科は農業。数校での勤務を経験した後、二〇一〇年四月に食品に関する専門学科を有する農業科高等学校へ異動となった。着任当日、当時の学科長から「食について何か得意な分野はありますか？」と尋ねられた。私は「そば打ちができますよ。そば打ち初段です！」と冗談半

そば打ち練習を行う生徒

分で答えた。「おもしろいな。なら、それやって！」と学科長は言った。これが全ての始まりであった。私は課題研究という科目を担当することとなった。この科目は五人の教師で担当し、それぞれの教師が食品製造、微生物、発酵等のテーマに従って生徒に対して研究指導を行うというものであった。生徒達は自らの興味や関心によって自分が所属する課題研究班を決定し、二年次と三年次の二年間に渡って研究・調査活動を行うという授業であった。分かりやすく言えば、大学の研究室のような感じである。私は一つの課題研究班を担当することとなり、そば打ちを研究テーマとして取り入れることとした。他の教師の課題研究班は食品製造班、バイオ研究班、微生物発酵班等とカッコイイ名称が付けられていた……、そば打ち班では、少々ダサい。そこで、そばの栽培から製麺までを研究範囲とし、農産加工技術班と名付けた。一学期初回の授業で所属班を決定する専攻調査を行った。その際、私は初対面の生徒達にそば打ち初段の認定書を見せ、「そば打ち、やれへんか？　そば打ち初段を取りたい者は私の班においで」などと呼びかけた。そば打ちについて語る新着任教師の姿は生徒達にとって非常にインパクトが強かったようで、約三十名の生徒が私の班を希望し、一番人気となった。

「そば打ち、やれへんか？」と声をかけ、生徒を集めたものの、そば打ち道具が足りない。仕方なく自作することと

した。90センチ×90センチの板を購入して、食品加工場の実習テーブルに載せて打ち台とし、木の丸棒を紙やすりで磨き上げて麺棒とした。木鉢は食品加工場のステンレス製ボウルで代用した。こま板と麺切包丁は数万円かけて自費で購入せざるを得なかった。

何とか道具を揃えることはできた。ただし、心配事があった……本当に生徒達はそば打ちに興味を持ってくれるのだろうか。二回目の授業時に早速そば打ちを行うこととした。この課題研究は二時間連続授業だったため、50分×2コマの時間があった。最初の50分では、私がそば打ちを行い、一通りの工程を生徒達に見せ、説明した。残りの50分で生徒達に実際にそば打ちを行わせた……が、うまくいくはずがない。50分で作業を終えられるわけがない。授業終了数分前になっても生徒達はまだ生地をこねたり、のばしたりしていた。「もうすぐチャイムが鳴るなぁ。時間の読みが甘かったわ、スマン」と生徒達に謝ると、「生地を冷蔵庫に入れておいて、放課後に続きをやっていいですか?」という返事が返ってきた。

放課後、生徒達は再び集まり、そば打ちの続きを始めた。生徒達が初めて打ったそばは不格好なものばかりであった。やはり高校生にそば打ちを教えることは無理があるかと諦めかけた時、「そば打ち、めっちゃおもしろいやん! 先生、明日の放課後も練習に来ていいですか?」と生徒達は口々に言い始めた。それから、毎日のように食品加工場ではそば打ち練習に取り組む生徒の姿が見られるようになった。

二〇一一年四月、農産加工技術班のそば打ち練習は校内で少し噂となっていた。噂を聞きつけた数名の一年生が「そば打ちをやってみたい」と申し出た。そこで、私は農産加工技術班の部活動化を模索した。活動内容や予算計画等を取りまとめ、一か八かで科会議で提案したところ、部の創設許可が出た。農産加工学研究部として活動を開始することとなった。

以後、毎年春になると、そば打ちに興味を持つ生徒達が入部を希望した。部員数は約二十名の小さな部ではあったが、生徒達のそば打ちに対する興味や意欲は凄まじく、様々な活動を展開した。高齢者介護施設を訪問し、そば打ちを見学してもらい、打ちたてのそばを試食してもらうというそば打ち演示活動は、特に大きな注目を集めた。この活動は、ある漫画家の目に留まり、二〇一二年秋に有名漫画週刊誌において四週計98ページに渡って生徒達の高齢者介護施設での活動と大阪の食文化を融合された物語が描かれ、話題となった。

二〇一三年には生徒二名がスロベニア共和国で開催された第12回国際そばシンポジウムに出席し、日本における若者によるそば打ち技術の伝承推進の重要性に関する研究発表を英語で行い、世界的な注目を集めた。生徒達は段位取

※編集部注／応募段階では写真は添付されていませんでした。

スロベニアでの国際そばシンポジウムで研究発表を行う生徒

得にも注力し、全麺協素人そば打ち二段、初段だけではなく、福井県の越前そば道場そば打ち段位、広島県の豊平流そば打ち段位、大分県の豊後高田流そば打ち段位に自主的に挑戦し、多くの生徒が合格した。高校生のそば打ち大会である全国高校生そば打ち選手権大会にも二〇一二年度以降出場し、二〇一三年度は三位入賞、二〇一六年度及び二〇一七年度は敢闘賞を受賞した。同じく高校生の大会であるそば甲子園には二〇一五年度以降出場し、二〇一五年度及び二〇一六年度の二年連続優勝を果たした。ボランティア活動の一環として地域の方々に対するそば打ち講習会も継続的に行い、年間で約二十回、約二百名の方々を対象に実施した。

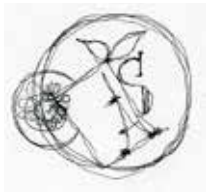
当初、生徒達がなぜそば打ちにハマったのか、私にはわからなかった。「今日は湿度が高いから加水の調整が難しい」、「生地の厚さにムラが生じてしまったから、麺線の幅が揃わない」などとプロのそば打ち職人のようなセリフを発する生徒も現れた。

そば打ちに取り組む生徒達全員が決まって言う言葉があった。それは「打ち終えた後の達成感がたまらない」というものであった。食品としてのそばに魅力を感じている者も数多くいたが、生徒達にとっては完成した麺よりも製麺過程に価値を見出しているように思えた。そば打ちには特殊な食品製造機器、道具、材料を使わない。粉と水のみ

筆者による地域の子ども達対象の年越しそば講習

を材料として木鉢、麺棒、包丁等の簡素な道具を用い、自身の体のみを動力として麺を完成させる。機械類は一切使用しない。自分の腕や指先の使い方、生地に触れた時の感触、体重移動の加減によって仕上がりは左右されてしまう。また、のんびりと作業をしていると、生地が乾燥してしまい、生地の割れや麺の切断が生じてしまう。すなわち、自分の体と道具をいかに効率良く使うことができるかが重要となってくるのである。最近の高校生は生まれた時から世の中の機械化やデジタル化が進んでおり、便利な道具類に頼って生活しているため自分の体をうまく使えない者が多い。昭和世代の者であれば、物体にこのくらいの力をかければこのように変化するであろう、この道具を使う時はこのくらいの力が必要であろうと見当をつけることは、幼い頃の遊びの中で経験済みである。砂場で遊んだり、木や粘土で工作したり、親のマネをして家事を行ったりした経験が生きているのであろう。しかし、今の高校生たちはそのような経験が欠落しているためか、自分の体の使い方を理解できていない者が非常に多い。粉に水を加える、手で生地をこねる、麺棒を転がす、包丁を握る……当たり前のことが当たり前にできない生徒が非常に多い。そのよう若者たちにとってそばを打つという行為は非常に新鮮なものに感じられるようであった。だから、生徒達はそば打ちにハマっていったのではないかと私は考える。また、そば打ち技術の習得は生徒達にとって大きな自信となり、そば打ち技術を用いた様々な活動は生徒達の大きな成長に繋がった。二〇一〇年春に何となく「始めた」そば打ちを用いた教育活動が、このような大きな成果を残すことになるとは思いもよらなかった。

現在、私は自らの農業に関する専門性を活かし、耕作放棄地の有効利用、農地の保全に関する仕事に関わっている。そば打ちを辞めたわけではない。毎年、大晦日（おおみそか）には地域の子供たちを対象にそば打ち講習会を開催している。楽しそうにそば打ちに取り組む子どもたちの姿を見ると、そば打ちにハマっていった生徒達を思い出す。そば打ちは我が国固有の食品製造技術の一つである。その技術の伝承のために、より多くの若者にそば打ちを体験してもらいたいと考える。そば打ちには、若者を魅了する「何か」が備わっていると確信している。



**石田真一**

いしだ　しんいち

1975年生まれ

宮崎大学大学院農学研究科

修了（飼料作物学研究室 学生室長）

17年間、農業科高等学校教諭として食農教育に携わる

その後、専門学校専任講師として農芸化学に関する研究指導

現在は、耕作放棄地の有効活用、農地保全のため市民農園の運営・拡充に東奔西走中

第54回読売教育賞　最優秀賞

第46回毎日農業記録賞　優良賞

## 受賞の言葉

石田真一

「よっしゃーっ！」

受賞連絡を受けた私は、妻にガッツポーズで報告し、飛び上がって喜びました。一通り喜んだ後、思ったことは「あれは、本当にエッセイだったのだろうか」ということ。この度、賞を受けた文章は、自らの教育活動の記録としてまとめたもので、エッセイとして書いたものではありませんでした。そもそも、文芸に疎い私はエッセイの定義を知りませんでした（恥ずかしながら、今も十分に理解できておりません）。そんな折、文芸思潮エッセイ賞の募集を知り、「この文章、何となくエッセイぽいから応募してみるわ、一八〇〇円ちょうだい」と妻に頼み応募してみた……というのが、正直なところなのです。

まさか、最優秀賞という素晴らしい栄誉を与えて頂けるとは、想像もしていなかったので、未だに驚いております。心よりお礼申し上げます。この度の受賞を機に、今後は文芸への理解を深めていきたいと考えております。本当にありがとうございました。

Essay

# ビオラ

## メーシリング順子

「お元気ですか？　突然ですが、Aが、亡くなりました。久しぶりにご連絡するのに、このような悲しいお知らせですみません」

Aは、私のビオラを作った職人だった。月の末、Aの奥さんからのメッセージを朝一で見た私は、「えーっ」としか言えなかった。まだ、五〇歳ちょいくらいで若かったし、何より、ハーレーダビッドソンに乗って、大きな体でアトリエにやってくる姿は、「死」とは程遠いものだったからだ。事故にあったのかと思った。

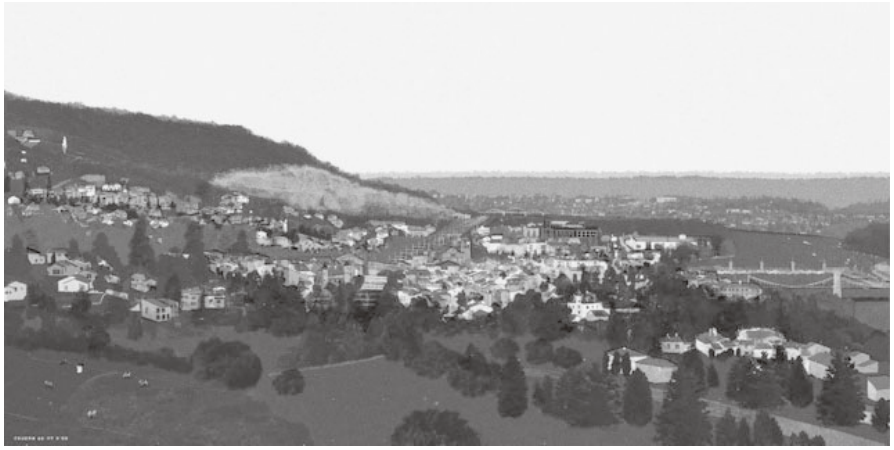
お葬式に行くと、ものすごい数のバイカー達が集団で、轟音を上げながら到着していた。式場の左半分には、彼を慕う音楽家たちが座り、棺の近くで、バッハのドッペルコンツェルトを演奏をしていた。そして、もう半分に、革ジャンのバイカー集団が座った。入りきれないバイカー達は、腕組みをして仁王立ちになっていた。そこで初めて、Aが、白血病で亡くなったことを知った。

私がビオラを始めたのは、そんなに昔の話ではない。私は、ドイツの大学で、三〇歳を過ぎてもまだ、悠長に音楽の勉強を続けていた。ちょうど三〇歳を過ぎたころ、困ったことに、原因不明の右手の震えのせいで、バイオリンが弾きづらくなってきた。そこで、大学の教官が、ビオラを勧めてきた。しょうがないので、ビオラを受け入れた。しかし、結局、お金も続かなくなり、六年ほど通った大学をやめてしまった。そこから、アマチュアのオーケストラで弾いたりしていたが、ビオラではなく、バイオリンを弾いていた。

ビオラを弾くと、訳の分からない変な記号の楽譜を読まなくてはならないし、何より、負け組の仲間入りをするような気になってしまうから、弾かなかった。バイオリンが花形で、ビオラが落ちこぼれと言う古いイメージにとらわれていたのかもしれない。でも、一番の理由は、右手が震えて弓が思い通りに使えなくなってから、自信を大きく失







フランス、リヨン市近郊のクゾンという小さな村。人口約 2500 人。この山の裏側から、ボジョレーの農村地帯が広がる。

イラスト：HifuMiyo

くしていたことだ。だから、「自発的ではない」ビオラへの移行という、「格下げ」感を、受け入れることができなかった。多分、当時の私は、Sサイズの服からMサイズの服を着なくてはならないくらい太ったとかいうような、些細なことで、傷ついてしまうほど、自分に自信が持てなくなっていた。完全に弱りきっていた。

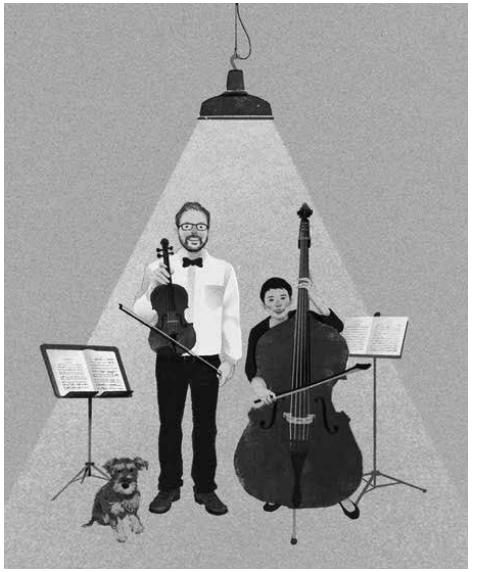
それが、今から、一〇年くらい前のことだ。

そんな時、夫がフランスのリヨンという都市へ転勤することになった。フランスという国は、ドイツみたいには英語が通じない。というか、フランス語が話せないと生きていけない。そこで、学校に通い始めたが、講師以外のフランス人と話す機会はあまりなかった。

そのため、オーケストラに入ることにした。音楽という目的があれば、集合場所や練習時間をフランス語で理解しようという気になる。生きたフランス語にも触れることができる。そのため、バイオリンを抱えて、あるオーケストラに飛び込んだ。

そこから、ネットワークが広がるのには、そんなに時間はかからなかった。音楽という共通の目的があるからか、フランス人達は、辛抱強く、私の相手をしてくれた。

そんな中、たまたま当時ついていたバイオリンの先生が妊娠し、産休にはいったため、新たに先生を見つけなくてはならなくなった。そこで探し当てたのが、ビオラの先生



コントラバスを弾く夫とビオラを弾く筆者が楽器を交換してふざけている様子を描いたイラスト。愛犬のくうちゃんも、オーケストラのリハーサルにいつも参加していた。

イラスト：HifuMiyo

だった。バイオリンの先生を探している、という私の説明の七〇％程を理解したフランス人が、バイオリンではなく、ビオラの先生を紹介してくれたのだ。良い機会なので、ビオラのレッスンを受けてみることにした。

その先生が、ビオラマニアだった。ビオラがこの世で一番素晴らしい楽器だと思っているような人だった。最初は、元の先生の産休があけたらまたバイオリンに戻るつもりだったので、そんなに真面目にビオラに取り組んではいなかった。ただ、いつのタイミングかは分からないけれども、少しずつ、ビオラが楽しくなってきてしまった。バイオリンにはない低音が、心地よくなってきた。もっと豊かな低音を弾きたくなった。当時私が弾いていたビオラは、小さく、なかなか深い低音を出すことができなかった。ビオラというよりは、少し大きなバイオリンだった。そこで、新しく大きめのビオラを探すことにした。それが、Aのアトリエに行くきっかけとなった。ビオラマニアの先生が、リヨンの街中（まちなか）のネズミの住処（すみか）みたいなAのアトリエに連れていってくれたのだ。

そこでは、一九〇センチくらいありそうな、ものすごい大きな長髪のおじさんが、四畳半程のスペースの薄暗い部屋で、たくさんの木材に囲まれて、猫背になって作業していた。彼の話を聞いてみると、奥さんは、プロのビオラ奏者らしく、ビオラに深い思い入れがあるようだった。彼は奥さんを思って、彼女が弾くことを想像して、ビオラを作っていたのだと思う。無口なAが、嬉々として、初対面の私に奥さんのことを話してくれたことを、今でも思いだす。

彼のアトリエには、二台のビオラがあった。ひとつは、とてもちゃんとした音が出る楽器で、試し弾きをすると、私の友人はみんなこちらを買うべきだと言い張った。ビオラマニアの先生も、「この楽器でオーディションに行ったら、必ず受かる」みたいなことを言っていた。でも、もうひとつのビオラの、何か暗い、反逆児的なくせに温かい、豊かな音に、私は釘づけになってしまった。私の中にある何かと、共鳴した。これは、私だと思った。琴線に触れるとは、こういうことを言うのかもしれない。確か一万六千ユーロくらいする大きな買い物だったが、何の躊躇もなく、すぐに買うことにした。

後々、奥さんから聞いたのだが、あんなにすぐに購入を決めた人はいないと、Aが驚いていたそうだ。

そんなに早い決断をすることができたのは、このビオラが、私に似ていたからだ。

私は、人から変わっていると言われる。自分では変わっているとは思わないし、若い時は変わっていない人になるべく、一般的な基準に合わせようと必死になったこともある。その基準が分からなくて、はじき出されたこともある。枠に入ることができない。何がずれているのかも皆目見当がつかなかった。

だから、常識を振りかざす人がいると、どうしても身構えてしまう。それでいて、そういう常識のような枠を見せられてしまうと、壊したくなったりする。そんな時に芽生える、なんだか小さな闘志というか、切ない反骨精神、それがあのビオラの繊細なのに無骨な低音だと思う。思春期の「そんな枠、壊してしまえー」みたいな破壊的な美しさがある。ちょっとした刺激に、ヒリヒリとしてしまいそうな、危うさや暗さがある思春期が、未だにある音がする。

それでいて、何かを包み込むような、温かい音色でもある。何というか、要は全てがひとつであることを、心得ているような音がする。例えば、私達の体の中には、赤血球や血小板があったり、神経があったり、腎臓があったりする。それが私という固体を創り上げている。そんな感じで、私達は、この世界を創り上げている気がする。これは、うまい例えではないかもしれない。でも、世の中のあらゆることが、このものすごくシンプルな法則に基づいている気がする。総理大臣であれ、失業中のニートであれ、庭先に生える柿の木であれ、術後にエリザベスカラーを着けられている間抜けな柴犬であれ、個々がとんでもなく大切な意味を成している気がしてならない。有益か有益じゃないか、生産性があるかないか、そんな感じを超えに超えて、とにかく全てのあらゆる物が、大きな何かを形作る大切な一部であると、そう思えてならない。

Aが作った私のビオラは、そういう音を出す。今も私の手元にあるそのビオラは、やんちゃで危うい、それでいて全てを包み込むような、温かい、優しい音がする。

みんないつか死ぬ。それまで何だか生きている。何だかあるような、ないような意味を背負って、いろんな形で生きている。よく考えたら、どうかしてる。本当にどうかしちゃってる。チベットの砂絵みたいに、最後には吹き飛ばされてなくなっちゃうみたいに、生きていたら、死がやってくるのに、みんなすごく生きている。きっと、それで良いのだと思う。

※編集部注／応募段階では写真・イラストは添付されていませんでした。

彼の棺に「ビオラ、ありがとうございます。これからも、ちゃんと弾きます」と書いて、式場を後にした。寒空の中、後方から、「ケンタッキーに行くって約束したじゃない」というAの親戚の子供の声が聞こえた。

**メーシリング順子**

メーシリング　じゅんこ

1978年広島県生まれ。父、母、妹、弟の5人家族。幼少期を佐賀県佐賀市にて過ごす。6歳からバイオリンを始め、若楠小学校卒業後、佐賀大学付属中学校に入学。副校長と口論の末、「学校に来なくて良い」と言われ不登校を決断。父の仕事の都合で再び広島に戻り牛田中学校に転校するも、いじめにあい2年間不登校に。その後、内申書がないにもかかわらず受け入れてくれた私立鈴峯女子高等学校にて、逞しい女子達に囲まれ生きる術を学ぶ。広島大学学校教育学部を卒業後、非常勤講師等を経たのち、父の勧めにより渡独。ケルン大学に入学し、教員となるべく英語、ドイツ語、音楽を学ぶも中退。その後フランス人の夫と結婚。現在はフランス、リヨン近郊にあるソーヌ河沿いの村に住み、趣味でオーケストラや室内楽を楽しみながら、フリーランスとして翻訳の仕事に従事している。

## 受賞の言葉　メーシリング順子

ありがとう。

私のビオラを創ってくれたAさん、そしていつも素晴らしい助言をくださるAさんの奥さん、ビオラの先生、右手の震えがあっても「一緒に弾こうよ」と言ってくれる音楽仲間、ユニークで愉快な家族や友人たち、コロナ禍で村の郵便局が閉まってしまい作品が郵送できなくなった際、応募できるように手を尽くしてくださった編集部の方々、応募料金を肩代わりしてくれた両親、音楽に一切興味がなかったのに、コントラバスを習い始めて、今では私と一緒に弾いている夫のサイモンちゃん、本当に皆さんありがとう。この作品があるのは、皆さんのおかげです。そして、最終選考通過の通知を受け取った六月二四日の朝、突然、電車の事故で亡くなってしまった愛娘の犬のくうちゃん、天国から応援してくれてありがとう。何より、小さなバイオリンと大きなビオラさん、こんな愉快な出会い達を、私の人生にもたらしてくれて、ありがとう。

そして読者の皆様、ちょっと間抜けな私のお話を、最後まで読んでくださったことに、心から感謝します。ありがとう。





第15回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

# 珈琲店の奇跡

東出菜代

わたしはその日、死んでしまいたいほど人生を悲観していた。

折悪く、大雨である。疲弊した心と身体を引き摺りながら、やっとのことで家路に着いたその途中で、珈琲の豆を切らしていることに気がついた。豆がないということは、つまり、次の日の朝、珈琲を飲むことができないということである。死にたいほど悲観しているというのに、気持ちの良い次の日の朝のことを考えているわけだが、この時点でやはりわたしは心の底から投げやりになっていたわけではなかったのかもしれない。

とにかく途中まで来た道を引き返し、商店街にある珈琲店に向かった。豆を買うのはいつもそこ、と決めていた。靴はすっかり雨に濡れて、中にまで浸透している。心底うんざりした。わたしは疫病神に取り憑かれているのだ。いつも最悪に運が悪くて、これからもいいことなんて何一つない。歩いている間中ずっと、わたしは心の中で呪詛を唱えていた。神や仏やありとあらゆる見えないものに、こんな言葉を呟いてもいた。「いるっていうなら、いま証拠を見せてみろよ」どうせなにかが起こるなんてこと、ありっこない。

店の自動扉が開くと、正面のカウンターに立った若い男性店員が「いらっしゃいませ」と明るい声で言った。初めて見る店員だった。いつもの豆を手に取ると、すぐにレジに向かった。豆は挽くか、ペーパーフィルター用か、などといった簡単なやり取りを終え、わたしは会計を待っていた。

若い店員は口元に微笑みを湛えながら、ゆっくりとカウンターの向こう側を動き回っている。豆はまだ出てこない。会計を済ませると、彼はわたしが提示した店のポイントカードを「こちらがポイントカードです」と返し、次に、「こちらが領収証です」と一枚ずつ手渡そうとした。その丁寧さにわたしは苛立った。一度に渡してくれよ、なぜそんなにノロノロしているんだ。心の中で悪態を吐いた時、三度目に彼が言った。

「そしてこちらが、お客様にお受け取りいただきたいものです」

彼はわたしに向かって小さな菓子を差し出していた。そ

れはレジ横でよく見る三百円ほどの洋菓子だった。

「え？」わたしは面食らって、思わず聞き返した。だって買ってないから。

「実は、お客様のすぐ前の方が、会計中にお電話に出られていたのですが、なにかとても良いことがあったと言われて。お会計はされたのですが、こちらの商品をすぐ次に来られるお客様に差し上げていただけないか、とおっしゃり、お受けしたのです。とても嬉しいことがあったからと言って、そのお客様はすぐにお店から出て行ってしまいました。そして次に来られた方が、お客様だったのです。ですから、これはお客様のものです」

理解ができずに、え、え、と繰り返すばかりのわたしに向かって、彼は満面の笑みを浮かべながら、さらにこう言った。

「どうかお受け取りください。さきほどのお客様のお気持ちなのです。もちろん、店でさっきまで売っていたものですから、なんの問題もありません」

おずおずと頷くわたしに向かって、彼は「ありがとうございます！」と礼を言った。それから、挽き終わった豆と洋菓子を手提げ袋に入れ、「先ほどのお客様もお喜びになると思います」と満足げに微笑み、わたしに持たせてくれた。

「あ、ありがとうございます」

やっとのことで笑みを浮かべ、店員に挨拶すると、わたしは店を出た。

通りを歩きながら、紙袋の中を覗き、自分に起こった出来事を反芻した。どれくらいの時間差でその人は店を出たのだろう。わたしは店を振り返った。暖かそうな店内の照明が、暗い夜道の道しるべのように灯って見えた。雨はいつの間にか上がっていた。

時空が歪んで、わたしの人生に突然なにかが介入して来たような感覚に襲われていた。とにかくこの出来事は一瞬でわたしの気持ちを変えてしまった。水たまりを跨ぐ濡れた靴も気にならない。店の人にこんなことを提案されたことも初めてだった。その客は、女性だったのか、男性だったのか。その客のことをもっと詳しく聞いてみようか、とはあとで考えたことだったけれど、同じ男性店員には、なぜか二度と会えなかった。

もしかしたら天使が現れたのかもしれない。わたしは本気でそう考えた。あの時、なにか優しい慰めの言葉を誰かにかけられたとしても、わたしのなにも変えることはできなかったと思う。気休めの言葉を握りしめたまま、きっとわたしはますます自分を呪ったことだろう。目の前で鮮やかに現実が動くことのほうが、あの時のわたしには、はるかに説得力があった。

「人生が求めるものに応答する」それは、ナチスのユダヤ人収容所を生き延びたヴィクトール・フランクルの著作に記された彼の生きる姿勢を端的に表す言葉だ。人生が求めるものにただ応じていく。たとえば、受け取って欲しいと言われたものを受け取る、というようなこと。ただ、それを繰り返す。どんなに絶望していたとしても、五分後には人生ががらりと変わることもある。次の曲がり角では、なにがあなたを待ち受けているか分からない。わたしにとっては、小さな奇跡だった。まるで、アリアドネの糸のような。だが、その小さな手がかりを掴んで、わたしは一気に絶望から抜けられた。

網の目のように繋がるこの世界の中で、喜びを誰かと共有したいと誰かが願い、誰かがそれを何の関係もないわたしに繋いでくれたことが、あの時のわたしを救ってくれた。

きっとこうやってわたしたちの世界はできている。どんなに独りきりに思えたとしても、現実のものたちが作る世界の中で、きっと見えないものたちも、わたしたちと一緒に生きている。

人生に悲観することはままあるけれど、この一件のあと、わたしはあの時のような投げやりな気持ちで自分自身や人生に呪詛を吐くようなことはなくなった。

たとえ希望の光なんてまったく見えなくとも、積極的になにかを動かしたり、動いたりする気持ちにならなくとも、そんな時は人生が求めてくるものにただ答えることだけを考える。

人生にはあなたを待っているものがある。それがどういうものかはわたしたちの立っている場所からは決して分からないけれど、曲がり角を曲がった先では、海が見えるかもしれないのだ。これから先、どんなに人生に悲観したとしても、そのことだけは忘れないようにと「珈琲店の奇跡」と名付けた、宝物のような思い出だ。

東出菜代

ひがしで　なよ

慶応義塾大学文学部卒

## 受賞の言葉

東出菜代

五分後には人生の基調ががらりと変わることだってありうる。それがこのエッセイで伝えたかったことでした。言及したヴィクトール・フランクルの言葉は、著書『それでも人生にイエスと言う』の中に出てきます。そちらを読んでいただくと、「人生に応答する」と彼が言った言葉の意味が、よくお分かりいただけると思います。フランクルの言葉がもっと沢山の人に届けばいい、と思います。このたびはありがとうございました。

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

# ビーバーの日

藪口莉那

目を開けると、黒と紺を幾重にも重ねた空と、月と星があった。ホステルで相部屋となった五人の寝息が、水に垂らした絵具のようにきれいに調和し、カナディアンロッキーの澄んだ空気に柔らかく広がっては溶けていく。寒さがひたひたと肌にしみ込む。時計の針は、四時を指していた。七時には、予約しているハイキングツアーのガイドが宿へ迎えにくる手筈だ。天井にぽっかり開いた天窓から見える夜空を見上げながらもうひと眠りするかしばし迷い、結局、私は目を閉じた。

「中度の鬱ですね」

私が半日かけて記入した調査票をめくりながら、医師が言った。心当たりはいくつもあった。布団に潜ってもなかなか寝付けず、太陽がのぼる前に目覚める夜が、二年ほど続いていた。眠ると嫌な夢を見た。当時の日記には、仄暗い夢の記録が書き留められている。

「嫌な夢を見た。私は腹這いにならないと通れない狭い洞窟の中にいる。目の前にはナイロン袋がひとつ。中にはいっぱいに蝙蝠の頭が入っている。誰かが私の前にいて、平然と先へ進んでいく。彼の足にぶつかった蝙蝠が動き出し、這いながら私に向かってくる。」（九月十九日の日記より）

休日はベッドから出られない。布団にくるまってぼんやりとしていると、空は青から茜色にかわった。感情は水底に堆積する泥のように鈍重だった。ある日、本を開くと、文字が読めなかった。それきり日課の読書もやめた。仕事と眠れぬ夜ばかりが積み重なった。

私の人生に用意された楽しいことは、もうすっかり過ぎ去ってしまった。残りは、出がらしのお茶のように味気ないものなのだ。

ある朝、通勤路を歩いていたはずが、気が付くと車道に立っていた。車がすぐそばを走り抜けた。翌日、私は心療内科を予約した。



ボォーウ、ボォーウ、ボォーウ

オーボエを思わせる低く、長いテノールが夜気を震わせた。私は目を開けた。あたりはまだ真っ暗だ。音は何度も繰り返された。

――貨物列車だ

私は、昼間サルファー山の遥かな峰で、同じ音を聞いたことを思い出した。緑のモミの木と黄金のカラマツに彩られ、森林限界を超えた天辺に真っ白な雪を戴くカナディアンロッキーの山々が連なっている。山々の底を、蛇のようにボウ川がうねり、その蛇の腹に、白木の壁と赤い屋根、そして色鮮やかな高山植物に彩られた小さな町が寄り添っている。これが、カナディアンロッキーのバンフ国立公園内に築かれた町、バンフである。

バンフを囲む山々の一つ、サルファー山の天文台からは、そんな山々や町が一望できた。天文台の柵にたどり着くと、雄大な魂が私を包み込んだ。私は、しばらく身動きできなかった。この峰のずっと向こうには、私が過ごしてきたカラカラの日常も確かにあって、私のいない空っぽの家や、オフィスで深夜までパソコンを打ち続ける同僚たちがいる。それは、どうしてもしっくりと腹に落ちなかった。

ボォーウ、ボォーウ、ボォーウ

警笛が柔らかく反響した。見ると、小さな赤い貨物列車がゆっくり谷間を進んでいる。

「スピードがとても遅いだろ？　野生の動物をはねちまわないように、わざとそうしているのさ。のんびり走るからいつどこを通るのか誰にもわからない。こんなところから貨物列車を見られるなんて、俺たちはラッキーだ」

近くにいた男性が、友人に話す声が耳に入った。貨物列車は、のぼのぼと進んで、やがて山影に消えた。

七時に迎えに来たガイドとともに登った山は、やはり途方もない自然に満ちていた。カラマツの金の葉が雪のように舞い、陽光を受けて輝く。岩と木々の間に時折湖がぽっかりと口を開け、その水は見たことのない青だった。

歩きながら、私は動物の声を聞き逃さないよう、耳をすました。旅の最大の目的は、野生動物を見ることだったからだ。

カナディアンロッキーは、野生動物の宝庫である。山中では、あちこちから動物の息遣いを感じた。ガイドは動物の痕跡を見つけるたびに、いきいきと彼らについて説明をした。

地面のあちこちに、クマが巣穴の中にいるリスを捕まえようと堀った穴があいている。

「クマも必死です。時々穴のそばに、剥がれたクマの爪が落ちていることもあります」

ピイピイと甲高い鳴き声が聞こえてくる。

「ナキウサギです。姿は滅多に見られません。警戒するとあんな風に鳴き、岩場に潜んでこちらをじっとうかがうのです」

説明を聞きながら立ち止まって岩場に目を凝らすが、動く影一つ見当たらない。結局、崖を駆けるリスを一匹目にしただけであった。

カナダへ行こう、と思い立ったのは七月のことだ。心療内科を初めて受診した日から、十ヶ月が経っていた。何かをやりたいという気持ちが湧いたらチャレンジしてみるといい、と医師に言われていたが、気力が湧かないまま初夏を迎えたある日、旅行代理店の窓に貼られたカナダ旅行の広告を目にした。そこに写るビーバーの写真が、なぜか家に帰っても頭から離れない。子供の頃通った英会話教室のカナダ人の先生が語るビーバーの話に憧れたことを思い出した。

リスが駆け、エルクが時折木陰から顔を覗かせる深い森。その中を流れる美しい一筋の川を、音もなく、水流よりずっと素早く、茶色いビーバーたちが泳ぎ抜けていく。対岸を、大木の枝のような角を生やした巨大なムースが行く。先生の語るカナダの動物たちの姿は、まるでお伽話の生き物だった。ビーバーたちや、それらの暮らす美しい森や川が世界のどこかに実在するとは到底思えず、話を聞くたびに楽しい物語でもきくような幸せな気持ちになったものだ。

カナダで動物を見たい。何かに興味を持つのは久しぶりだった。数日悩み、夏休みにバンフを訪れることを決めた。

翌日の早朝、私はひとりバンフ郊外の森林を歩いた。林道の奥の湿原にある湖にビーバーが住み着いている。早朝ならば会えるかもしれない、とハイキング中にガイドから聞いていた。その際クマについて再三気を付けるよう言われたので、私は細い一本道のぐにゃりと曲がったその角から、巨体がノシノシと現れる光景を、歩きながら何度も想像した。早朝にひとりで林道を歩くのは、やはり無謀だったかもしれない。

——引き返そうか

立ち止まって暫し逡巡した。しかし、翌日にはバンフを発つことになっている。チャンスは今と翌日の朝、二度しかない。私は、再び歩き出した。行く手に小川が現れた。上流に向かってしばらく進むと、足跡を見つけた。大型犬によく似た足跡が、川辺に点々とついている。バンフには狼もいると聞く。いよいよ勇気をなくし、私は来た道を引き返した。

その日の昼は、湖をめぐるツアーに参加して、十九時過ぎにホステルへ戻った。秋のバンフは二十時頃に暗くなる。最後の夕焼けは、町中にあるボウ川沿いの散歩道で味わうことにし、私はカメラを手にボウ川へ向かった。

町は着々と夜の衣装を纏い始めている。店は暖色の明かりを灯し、デッキでは酒を酌み交わす人々が談笑している。教会の前で、ヴァイオリン弾きの若者が本日最後の一曲であろうアメージングレースを奏ではじめた。空に薄い赤紫のヴェールがかかる。

二十分ほど歩くと、ボウ川の細い散歩道にたどり着いた。息を吸うと、草と土の匂いがした。私はベンチに腰を下ろした。とうとうと流れる川の水は、晴れた日の青空に、ほんの少しの緑を混ぜた色だ。対岸には緑と黄金の木々が目一杯伸び上がり、一艘の赤いボートがふかふかと浮かんでいる。水音が耳元で跳ねた。

来てよかった。私は声に出して繰り返した。動物は見られなかったけれど、自分で計画し、飛行機もバスもホテルも調べて予約して、この地へたどり着いたのだ。一年前には文字もろくに読めなかったというのに！　今回は、辿り着けただけで花丸じゃないか。

繰り返しながら、やはりこの先の人生はうまくいかないのかもしれない、という疑念が確かに芽生えていることに気付いていた。太陽はいよいよ美しく消えゆこうとしている。

その時、茶色い丸いものが川面に浮かんだ。

拳ほどの大きさのそれは、川の真ん中をすいすいと進んでいく。私は、慌ててカメラを取り出し望遠レンズを川面に向けた。黒い耳と、犬のような鼻。ふくれた頬の上に、ビーズのような小さな黒い目がきらりと光る。

私は走り出した。すると、相手もすいすいと水を切ってこちらに近付いてくる。私は、それの向かう辺りの川辺にしゃがみ込んだ。息を潜めて見守る前で、その生き物はとうとう川辺にたどり着き、地面に姿を現した。丸い背中に、狸のような尾が一つ。ビーバーだ。

私達の距離は、ほんの三メートルほどだった。ビーバーはおっとりとした動きで辺りを見回した。そして、たしかに私と目があった。しかし、ビーバーはそんなことは意に介さず、川辺に転がった小枝に手を伸ばし、長い爪を持つ小さな両手でそれをひょいとかかえてかじり出した。

——コッコッコッコッ

木製のカップを木の棒で叩くような、小気味よい音が水音と混ざる。ビーバーの小さな目は泳いでいた時より一層爛々と輝いた。

私は、ただじっとビーバーを見ていた。金鳳花のように鮮やかな幸福感が胸の奥に滲んだ。

これから全てがどんどん良くなる。はっきりとそう思った。

あの日から半年が過ぎた。悪いことも多くあった。しかし、気持ちが水底へ沈もうとすると、決まってぽこりと川面に浮かんだビーバーの頭が見える。彼は滑るように泳ぎ、私の元へやって来る。そして、ビーズのような目で私をじっと見つめる。その目を見ると、あの日と地続きのこの日常をもう少し生きてみよう、そう思えるのである。

藪口莉那

やぶぐち　まりな

1986　兵庫県生まれ
2009　関西学院大学　卒業
12　大阪大学大学院　修了
その後、システムエンジニアとなる
08　もちろん奇妙に怖い話　優秀賞受賞
19 第36回日産童話と絵本のグランプリ
童話部門優秀賞受賞

## 受賞の言葉

藪口莉那

生きていると時折、魂を揺さぶられる出来事が起こります。曇り空をさらりと撫でて陽光を呼ぶ、一陣の風のような出来事。金色のカラマツを映すボウ川に佇むビーバーは、私にとってまさにそれでした。

あの日、私の心に差し込んだ光の暖かさを忘れないように——と、このエッセイを書きました。

受賞のご連絡をいただいた時、驚きと共にあの日と同じ光を感じました。この光を糧に、創作を続けていきます。

ありがとうございました。

ここにタイの真実がある
アジア文化社　2800円税込



# 第２回 文芸思潮 短歌賞 作品募集

**文芸思潮では、伝統短歌に基づいた清新な短歌作品を募集します。現代流行の短歌は志操が荒れ、真の叙情が喪失されています。日本の自然の中で育まれる感情と心の営為を洗い直し、それに基づいた真心を歌うことを目指します。子規や茂吉の近代短歌の伝統を保持し、精神の芯をなす、美しい言魂（ことだま）としての短歌を期待しています。**

**作品募集要項**

**趣旨●**伝統の短歌を、源流に立ち返って基盤を確かめ、日本の四季の中で紡がれる生きる力としての三十一文字を称揚する。伝統を再構築し、新たな精神の拠り所とすると同時に、それらの作品を世に広め、残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

**募集内容●**オリジナルの短歌作品。ただしこれまで同人雑誌・短歌誌に発表したものを改作したものも可。（これまで受賞した作品は不可）

**応募資格●**不問

**応募規定●**一人二首。（原稿用紙使用の場合も必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格）。ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い縦30字×横20行で印字。別紙を添付のこと（レイアウト自由）。必ず閉じること。
別紙に①応募部門（**2021年度第２回文芸思潮短歌賞応募作品**と明記のこと／封筒にも）②本名およびペンネーム③それぞれふりがな④年齢・性別・生年月日（生年月日ないものは失格）⑤〒住所（郵便番号は必ず明記のこと）⑥電話番号⑦職業・略歴
※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取りコピーの方を送付のこと。

**応募審査料●**1000円（二首分）を応募封筒に郵便為替（何も書き込まないこと／郵便局で入手）で同封のこと。切手可。外国からは9USドル。

**応募先●**〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社
「文芸思潮」短歌賞　係
TEL03-5706-7847　FAX03-5706-7848　E-mail　bungeisc@asiawave.co.jp

**賞●**文芸思潮短歌賞
最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金７万円（２名５万円／３名３万円）
※最優秀賞には書家による作品の料紙仮名書を特別賞として授与
優秀賞■賞状・賞メダル・賞金２万円（４名以上は１万円）
奨励賞■賞状・賞メダル　　佳作・入選■賞状・記念品

**選考委員●**五十嵐勉・他（交渉中）

**締切●**2021年1月31日（当日消印有効）

**発表●**予選通過者は2021年3月25日発売の「文芸思潮」79号に発表。
受賞発表・最優秀賞および優秀賞作品は6月25日発売の80号に発表掲載。奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載予定。

**主催●**文芸思潮

**※主催者から**　近代短歌の、自身と生命と生活を見つめる主体精神を大事にし、真の命の叙情を三十一文字の調べにする伝統の上に立った短歌作品を期待しています。美しい強い日本の言葉の深い泉にひたり、その清冽な水に触れさせてください。

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

# 息子の学生服

家森澄子

傘寿も過ぎ、身辺の片付けを思いついた。

押し入れの段ボール箱を取り出すと、息子の誕生の時からの写真があった、高校の卒業写真に目がとまった。

大勢の学生の中息子だけが目立っている。学生服がひどく小さく、紺の学生服の袖は短く、白のワイシャツが五センチ位出ている。金ボタンはやっとかけられ、ボタンとボタンの間は少しずつ開いていて、肩をすぼめて、身体を服に合わせて、ツンツルテンという格好だ。親の常識を疑われるような、目を覆いたくなる息子の姿であった。

四十数年前、息子の高校生時代のことが記憶力の衰えた今でもはっきりと浮ぶ。

息子は小さいときからスケートが好きで、小学校の頃から近くのスケート場に入り浸っていた。高校もスポーツの盛んな私立高校へ入学した。そこで小豆島から入学してきた林君男くんと知り合いになった。

彼もスピードスケートが好きで意気投合し、ともにスケートを練習し始めたが、学校にスケートクラブはなく県のスケート連盟に入り一般の人と練習を始めることになった。

授業終了後、二人は社会人に交じり二十二時まで練習に励んでいた。君男くんは十キロの道のりを夜自転車で下宿まで帰っていた。雨の日や土曜日には我が家に泊まることもあったが、彼の頑張りには、頭が下がった。

やがて二人は全国のスピードスケートの大会に出場するようになり、益々練習に拍車をかけた。学校以外の居場所はいつもスケート場である。私たちが手助けできることは何もなく、ただ、汗だくになって練習を終え、帰宅する二人の練習用のジャージを息子が持ち帰り、私が洗濯して持たせるくらいだった。土曜日など我が家へ呼び、何か精の付く食べ物をと思い用意して待っていた。

そんな二人が嬉しそうな顔で帰って来て、

「今年の国体に二人とも出場が決まったよ」

「おばさんのお陰です、草履のようなビフテキや野菜スープが力をつけてくれ、太陽の匂いのする清潔なジャージは





からだを温かく包んでくれました」

二人は一九七三年若潮国体にスピードスケートの選手として選ばれたのであった。

よい結果は出せなかったが、二人は互いに、

「君男くんの頑張りに励まされてここまで来られた」

「誠君の根性の強さを見習って、国体出場までこられた」

と、互いを信頼し切磋琢磨する深い絆を感じた。

日頃滅多に帰省できない彼は、国体も済み一段落着いたところで、「両親に会いに小豆島へ一日帰って来る」と言って、小豆島へ発った。

日曜日の午後倉敷へ着いたら電話しますと言っていた彼から、夜になっても連絡がない。

「たまに親子が会ったんだから、もう一晩泊まるのではないの」

と私が言うと息子は、

「そんなことで、学校を休むような君男くんではないよ。母さん、何かあったんだろうか」

そんな会話をしていたとき電話が鳴った。君男くんからかなと、思いながら電話に出た。

「……君男が、今朝亡くなりました……」

君男が亡くなったと言うところだけが耳に残り、頭は真っ白になり全身の力は抜けて、受話器を落とした。気づいた時には息子が受話器を握っていた。

息子は、流れる涙を抑えきれないのか、顔をタオルで覆い傍のテーブルを叩きながら、

「あいつは殺されたんだよ、何でこんな目に遭わなきゃあならないんだぁー」

夫と私は言ってる意味が分からず息子が落ち着く様子を暫く見て、夫が問いかけると、

「君男くんは朝ジョギングをしていて青信号の歩道を走っていたところを、信号無視のトラックに跳ねられたとお父さんが言われてた」

なんという可哀想なことか、一人のお子さんを失われたご両親の気持ちを察するといたたまれない気持ちになるが、夜も遅いので明朝早く小豆島へ立つことに決めた。

その夜は夫を交えて親子三人君男くんの思い出話で夜を明かした。息子の話だと君男くんは息子にとって莫逆の友だったと言う、どちらもひとりっ子なので、兄と思える時もあり、弟と思えるときもあったと言う。「僕が特に苦手な科目は何度も何度も教えてくれ、兄がおればこんなんだろうと思えた」と言う。反対にスケートの時は、君男くんの苦手なコーナーリンクの時の技を、何回も何回も教えて出来るようになったときは、二人とも飛び跳ねて喜んだ。二人はお互いに出来ないことを補い合い協力していたと言う。

ある日いつものように脱衣所で、練習用のジャージに着

替え練習を済ませ、学生服に着替えた。一週間くらい経った頃息子が学生服の内ポケットに何か固いものがあることに気付き、取り出してみると、小さなボタンであった。自分は入れた覚えもない見たことのないボタンであった。自分の物でもないので、君男くんに聞いたら、

「このボタン僕のだけどどこにあった？」

「僕の学生服の内ポケットにはいっていた」

その時初めて二人は学生服を間違えて着ていたことに気づいた。二人は口をそろえて言った。「全然違和感はなく身体にぴったしで、いつもの着心地とかわらなかった」と。

それぱかりか息子は、それを着ていたとき、ちょうど期末試験の時期で、一番苦手な数学が、クラスでトップの点数が取れたという。一方君男くんもそれを着ていた間に、スケートの短距離で一番いいタイムが出たと喜んだ。

二人はお互いの学生服が、苦手なものをカバーしてくれたんだ、意気もぴったしなんだから、それからは交換して着よう、ということにしたと話す。

若い者の考えることと、気軽に聞いていたが、君男くんが亡くなられたからには、明日お伺いしたときにあちらへ、事情を話しお返ししなくてはならないと言うと、

「母さんそれだけは待って、あちらへは言わないで。時期が来たら僕が返しに行くから」

息子には何か硬い決心があるようなのでそれ以上は何も言わなかった。

翌る日早朝に小豆島へ向かった。

さすが林家は旧家だけあって大勢の葬儀への参列者であった。受付の人は直ぐにご両親の元へ案内してくださった。お母さんのお顔も気の毒でまともに見られず、なんの言葉もかけられないまま、ただ抱き合って涙を流した。息子は納棺された君男くんに、

「君男くん」

と、寝ている人を起こすかように大声で叫んだが、返事が返らないので現実に引き戻されたかのように、ぐったりと棺にすがりつき、溜め息を大きくつき、どっと頬を濡らした。そんな息子にお母さんは、

「君男は誠くんに出会えて本当に幸せだったと思います。学校が楽しいといつも言っていましたので、卒業がまだなので学生服で逝かせることにしました」

と、言われて君男くんの肩の辺りを見ると紺色の学生服に白のカラーがちらっと見えた。

お母さんは息子と君男くんが学生服を交換して着ていたことなど知る由もない。

私は何とも言いようのない複雑な気持ちで胸が渦巻いた。

息子に目を向けると、涙の溢れる目を閉じて「これでいいのです」と言うように、深く頭を下げ頷いていた。

息子のこの姿を見て二人の友情の深い絆を感じ、なおさら愛おしさがこみ上げた。





複雑な気持ちであったが、お母さんも知らなかったこと故、いたしかたない。もし私があちらの立場だったら、あのように学生服を着せて逝かせたかも知れないと考えた。

帰宅して息子の反対するのを押し切って、学生服を買ったが、一日としてその服に袖を通さず、身体は大きくなり、日ごとに学生服の小さいのが目立つようになった。

卒業写真を撮る朝、見かねて、

「今日だけはこの服に着替えていって、写真は後々まで残るから、お願いだから」

口を酸っぱくしていったが、

「今日が大切なんだよ、服が小さくたって人に迷惑はかけないから」

と、息子は頑として聞き入れなかった。

卒業式の翌る日初めて、自分が君男くんの学生服に思いを託して通学したことを話した。

「君男くんの服で学校に通い、何もかも一緒にして、一緒に卒業できた」

なるほどそうだったのか、亡き親友の思いを学生服に託して通学した息子の気持ちに、暫く感涙して動けなかった。

明朝、君男くんに卒業の報告とご両親に今までの経緯をお話ししてから学生服をお返ししてくると、卒業写真を持って、家を出た。

仏前に跪き「一緒に卒業したよ」と、報告すると、線香の煙の向こうに八重歯を見せて笑う見慣れた笑顔が浮かんだという。

ご両親に学生服の経緯をお話しすると、床に両手をつかれて、

「知らなかったこととは言え、君男にあなたの服を着せて逝かせるなんて、取り返しの付かないことを致しました、お許しください」

「いいえ、僕はこれでよかったんです、君男くんも同じ考えだったと思います」

泣き崩れるお母さんに、君男くんと一諸に通学し共に卒業した友情の滲んだ学生服をお返しすると、胸でしっかりと抱きしめ、

「君男、お帰りなさい、卒業お目出度う」

嗚咽が漏れるその声が胸に響いたという。

お父さんは肩を力強く抱きしめてきて、

「誠くん、ありがとう」と言った。

その優しい声は君男くんそのものだったと、息子は目を脱ぐいながら話した。

もう一度卒業写真に目をやり、これも息子の青春の一ページだと思い、大切に仕舞った。

家森澄子

やもり　すみこ

1938　岡山県倉敷市生まれ
70　倉敷市役所奉職
85　近畿大学短期大学部商経学科卒業
2001　倉敷市役所退職
12　福井風花随筆文学賞優秀賞受賞
14　文芸思潮エッセイ賞優秀賞受賞
15　文芸思潮エッセイ賞奨励賞受賞
16　文芸思潮エッセイ賞奨励賞受賞
17　厚生労働省人材開発統括官賞受賞

## 受賞の言葉

家森澄子

この度は、四十数年前高校時代の息子の、古い写真から思い出が次々に浮かび、息子の気持ちを察し、涙を新たにしました。親としてあれで良かったのかという反省も致し、拙文でも、人生を二度味わうことができました。身に余る賞有り難うございました。

かつかか

## 新文芸ドン・キホーテ

駄作を量産し、日本文学を零落させるA賞・N賞の根本的改革は望めないのか。元凶文藝S社をどうにかするしかないのか。潰すかM&Aするか。だれかそんな人間が現れないか。ホリエモンがフジテレビを傘下におさめようと親会社のニッポン放送の買収を企てた時代から、そんなことを考えていた。しかし時代は変わり、ネット時代と活字危機で、体制は変わらざるをえないところへ追い込まれている。アップアップ断末魔の商業文芸誌を見る楽しみはある。

現役AV女優、紗倉まなの長編小説「凹凸」（KADOKAWA）を読む。文体は端正で、「AV女優が書いた小説」と馬鹿にされたくないかのような、過不足のない文章。母と娘、父の、愛されたい人々ばかりの歪（いびつ）な家庭の年代記。物語は微妙だが、昨年、中編「春、死なん」が「群像」に掲載されたのも頷ける文章力だ。ゴーストの疑いもなくはないが、又吉直樹の「火花」を一読したときも同じようなそこそこの文章力を感じた。問題は世の編集者や純文学作家が堕落し、芸人やAV女優が本気で書いたらしい文章を嘲笑えなくなるほど、技術も感性も俗悪になったことだ。今日も芸人やAV女優に芥川賞をとらせようと、どこかで断末魔編集者達が画策している。

純文学を志す無名の人よ、死ぬ気でこれを打ち破れ。

（檄文ジョーカー）




新刊

文豪の遺言

木内是壽

文豪の死には、作品を越えて人生に深く問いかけるものがある。文豪が残した最期の言葉――それは生きることの深さとその意味を投げかけてくる。文豪の赤裸々な魂に触れる貴重な遺言集。

坪内逍遥　尾崎紅葉　樋口一葉　森鷗外　田山花袋　泉鏡花
国木田独歩　夏目漱石　島崎藤村　芥川龍之介　永井荷風
谷崎潤一郎　志賀直哉　有島武郎　武者小路実篤　菊池寛
宮沢賢治　川端康成　小林多喜二　大佛次郎　岡本かの子
吉川英治　太宰治　井上靖　三島由紀夫　松本清張　遠藤周作
吉行淳之介　司馬遼太郎　寺山修司　向田邦子　中上健次　他

アジア文化社

2017.9.1 出版

1728円（税込）送料サービス

御注文は裏面を御覧下さい

作家の遺言は、死に臨んで純粋に自己と向き合い、飾り気のない一人の人間として自己の意志を発露している。それは作家自身の素顔に迫るもので、死にざまは生きざまに通じる。

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

# べこ石の浜辺で

金田一 淳

「むふんだー！」……今もなお、遠い谺のように耳奥に残っている叫び声。

「むふん」と言っても無分別の略ではない。無禅、つまりふんどしを締めない真っ裸のことだ。猥雑な響きを感じる向きもあろうが、口にするのはほとんどが子供だった。

私の生まれ故郷は、本州北端の下北半島にある大湊（おおみなと）という町だった。隣町の田名部（たなべ）からはふんどし町と揶揄される小さな町で、幅四メートルほどの狭いバス道路を挟んで、背後に畑を有する山側の家と海を背にした家とが海岸線に沿って蜿々と軒を連ねていた。海側の家は例外なく海に張り出していて、石垣の高台もあるが、ほとんどは木柱で組んだ櫓の上に建てられていた。海上からその木柱の林立を見ると、まるで横にした梯子のようだった。

夏場の子供たちの遊び場は海だが、海水パンツなどは贅沢な時代で、泳ぐのは普段のパンツのまま。陸（おか）に上がったら釜臥山（かまふせやま）の湧水や井戸水で洗って体ごと乾かした。私の家は山側で浜までは十数秒の距離だった。幼い頃はパンツを脱ぎ捨てた素っ裸で土間をペタペタと走り抜け、バス道路を横切って海側の家の脇を潜るようにして浜に向かった。

「むふんだー！」はそんな時の楽しいはしゃぎ声なのだった。

ただ、私のむふんの回数は少なかった。そもそもがカナヅチで、それには訳があった。

五歳の誕生日の頃のこと、私は兄たちの釣りにお供した。釣り場は家の近くの菊地桟橋で、桟橋の右側には廻送店の船が横付けになり、多くの人夫たちが荷の積み卸しをしていた。釣果を待つのに飽きた私は桟橋の中程へ行き、しゃがんで海中を見回した。澄んだ青緑に揺れている水底は砂地の所々に大小様々の石が点在していた。そして、ムラサキイ貝の付着した橋脚の周りに、背中に緑灰色を纏った大きな鯉ほどの魚（ボラだったらしい）が数匹、優雅に群れているのを見つけた。届くはずもないのに思わず手を伸ばすと、その影を察したのか、魚影は桟橋の右方へ移動を始めた。その動きを追って桟橋の縁から身を乗り出した私は、次の瞬間、前のめりに空中に投げ出され、そのまま落下した。

記憶はそこまでで、海面に叩きつけられた途端、私は気絶していた。

桟橋から落ちた後、すぐに浮かんではきたが俯せだった。





近くにいた廻送店の人が飛び込んで、体をひっくり返して仰向けにしてから岸に引っ張り上げ、水を吐かせたあと、おんぶして家まで送り届けてくれた……というのが、家族の会話などから知った顛末である。

この「あわや溺死事件」のせいで「弟をちゃんと見守れ」と叱られた兄たちは、また溺れられては迷惑だと思ったのだろう。皆で浜に出ると、兄たちは泳ぎを教えてくれるでもなく、「岸で遊んでいろ」と釘を刺したので、私はいつまでも泳げずにいたのだった。

いつも一緒に泳いでいるのは長兄・次兄と二人の従兄弟だった。四人は待ちくたびれるほど長く泳ぐのが常だった。いつまでも泳いだり潜ったりしていられるのは、海中に造られた休場があるからだった。皆はそれを「べこ石」と呼んでいたが、いつ造られたものかは誰も知らなかった。岸から十メートルほどの所に石をピラミッド状に積み上げたもので、皆は水深一メートルほどのその踏み台に立って呼吸を整えてから、また潜っていくのだった。牛の背中のように頼もしいところから名付けられたのだろう。

ある日、従兄弟が「もう一つ、べこ石を造ろう」と提案した。今のべこ石の向こうにもう一つ休場があれば潜行範囲が格段に広がるのだ。兄たちも賛成し、さっそく造り始めた。

浮き袋に使っていた車のタイヤチューブに板を敷き、集めてきた石を乗せて沖に運び、次々に海中に沈めた。私はせいぜい裏の畑や浜辺から石を運ぶくらいしかできなかったが、それでも、兄たちから「よし、よし」と褒められるのはうれしかった。

運んでも運んでも、海に入れても入れても、なかなか石の山はできなかった。直径三〇センチほどの平らな石がてっぺんに固定され、そこに立つことができればいいのだが、そのためには底辺部にたくさんの石を積まなくてはならなかった。

やがて、秋の気配が漂い始め、完成は間近だったが作業は中断した。

翌年、海のシーズンが到来すると、兄たちは作業を再開した。一気に完成を見た新しいべこ石は「二番べこ石」と名付けられ、皆はより遠くまで潜っていけるようになった。

私はというと、相変わらず岸辺にいて甲羅干しをしながらバケツ類の番をするのがお決まりだった。兄たちはたまに戻ってきて素潜りの獲物をバケツや魚籠に入れていく。

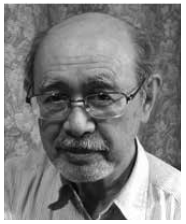
兄たちは皆、五寸釘を加工して三叉の簎（ヤス）を作り、それを手にして潜っていた。兄たちは柄の竹の長さを工夫し、従兄弟たちは強力ゴムで弾射できる細工をしていた。より遠くまで潜れるようになったので、獲物は格段に増えた。以前はナマコ・バフンウニがほとんどだったが、ムラサキウニ・カキ・アワビ・アブラメ（あいなめ）・クロダイ・カ

レイと豊富になり、時には毛ガニやタコも獲ってきた。
兄たちは休憩に戻ってくると、ナマコの両端を食いちぎって内臓を押し出したあと、海水で洗って生齧りする。そして、それぞれの獲物について、タコに絡みつかれたとかクロダイを手掴みできそうだったなどと武勇伝を語るのが常だった。その度に私は、いつか泳げるようになって兄たちの輪に入る日を夢見るのだった。
ところが、翌年に父母が就職先を見つけ、一家を挙げて札幌に引っ越したので、泳ぎを習得する機会は失われてしまった。そして、さらに六年経つと父が病気で離職したため、何のことはない、私たちは故郷に舞い戻るはめになった。
出戻りの中学三年生は学校では異邦人に近かった。級友たちの名前も顔も覚えはあるのだが、共有する少年時代が短かったので話題に困り、馴染んだ北海道弁だと下北弁の彼らと違和も生じた。ぎこちなさやもどかしさで、溶け込めない日々はしばらく続いた。
そんな五月二四日の早朝、兄たちの騒ぎ声に叩き起こされた。
「津波だぞ！　早く浜に出てみろ。海が膨れ上がってるんだ」
通りに出ると、大勢が走り回っている。私は兄たちの後について走った。
前日、地球の裏側のチリでマグニチュード9・5の大地震が発生した。一万七千キロの遠くから時速七百キロで日本に到達した津波は、太平洋沿岸などに甚大な被害をもたらしたのだが、津軽海峡を経て大きく迂回し、陸奥湾にも押し寄せたのだ。
消防屯所の横が海に突き出た広場になっていて、高さ四メートルほどの石垣の縁に立つと、今にも石垣を乗り越えるのでは思われるほど潮位が増していた。と、その勢いが止まって潮が引き始めた。引き波は細かな石や砂を巻き込んでジャリジャリ、カラコロと音を刻み、波打ち際が沖を目指して駆けていく。「それー、今だーっ！」と誰かが叫び、その声に弾かれたように、人々はバケツなどを手にして浜に駆け下りた。ウニもナマコも、逃げ遅れて跳ねている魚も慌てたように這い逃げるタコも獲り放題だった。
一旦、海が消えた。湾が瞬く間に干上がり、磯と砂床が見渡す限り露わになったのだ。
だが、私の目を惹き付けたのは、自分が見ることも立つこともできなかった、あのべこ石だった。引き波がベールを剥ぎ取っていくかのようで、一番べこ石のてっぺんから土台までがスゥーと現れたのだ。続いて、二番べこ石も姿を見せた。
私は裸足になって浜に降りた。初めて目にした一番べこ石は小さく見えた。ただ、近づくにつれて造りのしっかりしているのが見て取れた。
二番べこ石のそばに行こうとしたとき、けたたましく半





鐘が鳴り響いた。
「上がれ、上がれぇー」「津波が来るぞー」
屯所の火の見櫓から団員の叫び声が飛んでくる。ほとんどの人はそのまま獲り続けていたが、さすがに波が寄せてくると岸を目指して駆け出した。ザブザブと押し寄せるのではなく、ヒタヒタと水嵩を増してくるのでかえって不気味だった。
寄せては返す津波の間隔と潮位は徐々に弱まり、津波騒ぎは収まった。その年以降しばらくは、いくら潜ってもほとんど獲物を見ることはなかったと言う。さもありなん、まるで潮干狩りでもするかのように町民総出で浜の恵を攫ってしまったのだから。
三年後、今度は伊豆大島に職を得た父母が、先祖代々の土地家屋を売り払って故郷を去った。私は地方の大学を出て教職に就き、家族は皆それぞれに異郷に居場所を定めた。
やがて、墓だけを残して、父、母、長兄の順に他界し、その度に帰郷はしたが、浜の様子を見る余裕はなかった。しかし、四年ほど前に次兄の納骨で墓参りした折、五五年ぶりに我が家のあった辺りを訪れた。そして浜に出た私は唖然とした。海岸線はコンクリートの防波堤と消波ブロックで埋め尽くされていたのだ。十月末、陽射しが強くて暖かい午後だったが、訪れる人の気配が感じられない淋しげな浜辺だった。それは浜で遊ぶ子供たちが皆無であることを物語っているようだった。
さざ波で海の中は見えなかったが、それでも私には、泳ぎ来る人影を待ち侘びるべこ石の、淡い光に揺らめく姿が透かし見えてくるのだった。



**金田一淳**
きんだいち　あつし
1946　青森県むつ市大湊町生まれ
70　弘前大学卒業5年後から教師生活
2006　定年退職3年後から自分史の執筆
文芸思潮エッセイ賞受賞歴
最優秀賞（第12回）
優秀賞（第7回、第15回）
奨励賞（第8・13回）
佳作（第10・11・14回）

**受賞の言葉**　**金田一淳**

初応募のエッセイが優秀賞に選ばれてから十年後のこの度、優秀賞の通知を受けて「二度目があるとは！」と感激に震えました。故郷の自然がいつの間にか味気ない人工的な貌で横たわっているのを見て、亡き兄たちに思いを馳せつつ、ささやかな遺物を記憶に留めたくなったのが書くきっかけでした。評価して頂いたことに感謝しつつ、書くことへの意欲を新たにしていますので、今後も御指導のほどお願いいたします。

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

# 私を待つ人

松田正弘

タカちゃんが走る。腕を大きく振って、小さな体を左右に動かしながら懸命に走る。五年生にして初めて、一人で五〇メートルを走りきる。ゴールのところで「タカちゃーん、タカちゃーん」と叫びながら、その手がちぎれんばかりにおいでおいでをしている太った女の子がいる。僕は父兄席から妻と一緒にその光景を見ている。タカちゃんがその女の子を目指して、少しずつゴールへ近づく光景を見ている。女の子の胸には、「5−3 松田」と書かれたゼッケン。ゆうべ居間に吊るされていた体操服だ。タカちゃんの胸には「ひまわりぐみ 山本」と書かれたゼッケンが見える。妻が、まわりのお母様方が、「タカちゃん、がんばれー！」と大声で応援している。

幼少期に心臓と直腸の疾患が判明した次女は、毎日欠かさず複数の薬を服用している。おかげで大きな発症は免れているのだが、それらの薬がもたらす副作用が彼女を苦しめていた。太るのだ。ごはんの量を控え、努めて歩くようにしているのだが、薬の副作用には敵わない。とても太っているから当然運動が苦手である。だから運動会は彼女にとって苦痛以外のなにものでもなかった。個人競技はまだいい。自分がビリになるだけだ。けれど、クラス対抗の競技は地獄だった。いつも自分のせいでクラスが勝てない。そしてこの年頃の子供達は容赦がない。「また松田のせいで負けたやんけ！」……。口下手で、自分から積極的に話しかけるような女の子でもない。風邪をひいて二、三日学校を休んでも誰も気にとめないような、そんな存在だった。お友達も出来ず、いつもひっそりと教室の片隅にいて、下校時も家までの道のりを毎日一人でまっすぐ帰って来るような娘だった。

ある日妻が、「奈央な、このごろ朝ものすごくぐずぐずするねん。毎朝追いたてるように送り出してる感じ。ちょっと心配やわ」と言った。不登校？……、僕の胸のあたりがざわざわする。



それからひと月ほど経った、運動会が近づいて来た頃だ。妻の口から思わぬ話を聞く。

「給食食べたら毎日ひまわり組さんへ行ってるみたい」

「ひまわり組さん？」

「あ、知らんか。私らの時代にもあったやろ？　特別学級。発達障害の子や知的障害の子らがいる教室。ダウン症の子もいてる。一年生から六年生までみんな一つの同じ教室にいてるんやけどな、奈央、お昼休みに毎日ひまわり組さんへ行ってるらしいねん。ひまわり組さんは開かれてて、いつでも誰でも教室に入ってもいいってことになってるんやけど、まあほとんど誰も行かへんわな。けど、奈央はこの頃給食食べたら毎日一人でひまわり組さんへ遊びに行ってるらしいねん」

「え……、またなんでや？」

「クラスにお友達がいないんやろな。ある日、何を思ったか一人でひまわり組さんの前まで行ったら丸山先生が、あ、丸山先生はひまわり組の先生な。もうずっとひまわり組さんの担任で、丸山学級なんて呼び名もあるくらい。で、丸山先生が奈央に声をかけてくれはって教室に入ったみたいなんや」

「ふーん……、それがきっかけで毎日か？」

「うん、奈央が言うにはな、タカちゃんって子に会いに行ってるみたい」

「タカちゃん？」

「山本貴之クン。私もよく知ってる。お母さんとは時々買い物の時にヒカリ屋で合ったりして話すよ。感じのいい人やで。タカちゃんはいっつもお母さんにくっついてる。奈央と同い年なんやけど発達障害で……。学力は幼稚園児くらいらしい。体も細くて小さくて一年生くらいに見える。でもお母さん、タカちゃんが可愛いんやろなあってのは分かるような気がする。なんかな、ホンマに可愛らしいねん。私が挨拶したら、はにかんで、もぞもぞしながら小さい声で『こんにちは』って……」

「奈央はそのタカちゃんに会いに行ってるわけか」

「うん、タカちゃん、なんでか奈央のことが大好きみたいで、いっつも奈央が行ったら奈央ちゃーんって言って抱きついて来るんやて。奈央もタカちゃんが可愛いみたいで。あの子な、この頃ものすごく変わってきたんや。学校でのいろんな話をよくしてくれる。まあほとんどタカちゃんとか丸山先生とか、ひまわり組さんの話やけど、キラキラした眼で楽しそうに話してくれる。朝もぐずぐずせんと、元気に行ってきまーすって出て行くし」

給食を食べ終え、一人そっと教室を出てひまわり組さんへ急ぐ奈央の姿を僕は思い浮かべる。そして、その時の彼女の心情を想像してみる。

『私を待ってくれてる人がいる』――その想いは、どれほ

ど奈央を高揚させているだろう。自分が求められ、望まれ、必要とされているという意識は、どれほど奈央を奮い立たせているだろう。急いで給食を食べ、ひまわり組さんの教室へと向かう自身の歩みにどれほどの歓びを与えていることだろう。

もしかすると、これまでの学校生活の中で、奈央は初めて自分の存在理由を味わっているのかも知れない。

求められている場所へ、望まれている場所へ、自分の存在を歓喜をもって迎えてくれる人がいる場所へ、奈央はきっと味わったことのない歓びと使命感を携えて、力強く歩いているんだろうという確信に近い想像が、僕の胸を熱くしていた。

「たぶん、」と僕は言った。

「奈央は初めて、それも自分の力で、紛れもない自分の居場所を見つけたのかも知れんな」

運動会を一週間後に控えた頃、丸山先生から電話があった。

「奈央ちゃんをタカちゃんの隣で走ってもらうようにしてはいけませんか?」

どう思う?……妻の問いかけに答える。

「奈央の気持ちを聞いて、奈央がしたいようにさせてやったらどうや?」

五年生、五〇メートル走の最終組。五人がスタートラインに立っている。真ん中の二人はタカちゃんと奈央だ。ひときわ大きな奈央とちっちゃなタカちゃんが並んでいる。

ヨーイ、ドン!

奈央とタカちゃんが並んでスタートする。

タカちゃんは小走りで奈央の後ろを追いかける。奈央は手を繋いだりしない。彼女は彼女で一生懸命走る。タカちゃんも懸命に走る。半分くらいまで来た。もうすでに彼の最長不倒記録だ。いつもタカちゃんは、スタートして五、六メートルで座り込んでしまう。そうなると何をどうしようと駄目だ。結局二人の先生が両脇から抱え、ブランコのようにして彼をゴールインさせるのが毎年の光景だった。

けれど今、半分くらいまで一人で走った。奈央の背中を追いかけて、必死に来た。奈央はずいぶん先を走っている。と、タカちゃんが突然座り込む。「ああ、ここまでか……。でもよく頑張った」。きっと誰もがそう思った。けれど、一人だけあきらめていない人がいた。途中で後ろを振り返り、座り込んでいるタカちゃんを見た奈央は、躊躇なく踵を返し、走って戻る。座り込んだタカちゃんの二メートルくらい前で止まり、にこにこしながら、おいでおいでをし出した。あくまでもタカちゃんには触れない。

どれくらいそうしていたんだろう。僕はグランドの真ん中でいつまでもおいでおいでをする愛しい娘をじっと見ていた。

また突然だ。突然タカちゃんが立ち上がった。そして奈央を目指し、ゆっくりと走り出す。奈央は小さく二、三度拍手をして、今度は腰のあたりでおいでおいでをしながら走り出した。時々後ろを振り返りながら。

先にゴールインした奈央は、しっかりと正面からタカちゃんを呼ぶ。

タカちゃんがゴールインする。初めて一人で五〇メートルを走り抜き、いま、ゴールインする。

タカちゃんのお母さんが泣きながら妻に頭を下げている。妻も泣いている。

「主人です」。妻が僕を紹介した。初めて会うその人は、とても凛とした女性だった。

「奈央ちゃんのおかげで貴之が初めて一人で走り抜きました」

そう言って彼女は、僕に向かって深く頭を下げた。

「いえ、タカちゃんが奈央を救ってくれたんです」

心の中でそう言って僕は、彼女より少しだけ深く腰を折った。

松田正弘

まつだ　まさひろ

1957年生まれの62歳。立命館大学経営学部卒。京都、錦市場入口に食堂・居酒屋「風景」を開業して34年。今日も変わらず店に立っている。

## 受賞の言葉　松田正弘

思いもよらぬ嬉しい嬉しい受賞です。選んでくださった選考委員の先生方、心からありがとうございます。

年齢を重ねるにつれ、ますますレゾンデートル＝存在理由について思いを巡らす日々。僕自身もその一員を成す超高齢化社会において、家庭で、店で、必要とされる存在であり続けたいと願う。

十年後、果たしてそこに僕の居場所はあるだろうか。

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

# チキンライス

晋 多可幸

僕の家はダンスホールを営んでいて、一階には狭いながらもホールがあり、日々の生活は二階で過ごしていた。ホールにはダンサーがいて、お客さんとダンスのお相手をしていた。僕が小学生、もう六十年ほど前の話。

土曜日の昼下がり、下校していつものように勝手口を開け、二階への階段を上がろうとしたとき、予想もしない光景を見た。女の人が階段の一番下に座り質素な食事をしていた。ごはんと小さなお皿に盛られたおかず。たしか今朝自分が食べた朝ごはんと同じものだった。僕がドアを開けた瞬間、こちらに目を合わせることもなく、慌ててお盆を自分の脇に引き、通路を開けてくれた。無言だった。

驚いた僕は、その人の横をすり抜けるように階段を上がり、台所で洗い物をしていた母に報告した。

「知らん人が階段でご飯食べてはった！」

「ちゃんと挨拶したか」

洗い物の手を動かしながら、母は慌てる様子もなく答えて、言葉を続けた。

「すぐに出て行ったらあかんえ。あと十分くらい、部屋で本でも読んでいよし」

しばらく勉強部屋で本を読んでいると、階段を上がる足音とともに小声で会話する声が聞こえた。その後、階段を下りる足音のあと母の声が聞こえてきた。

「もうかまへんし。遊びに行っといで」

階段を下りていくと、階段下の狭い事務室から父の声が聞こえた。誰かと話している様子だ。出かけるときに少し開いたドアから、先ほどの女の人が見えた。泣いているようすだった。なにか見てはいけないものを見てしまった気がして、そのまま外へ出た。

次の日の日曜日、父が外出で一人ぼっちになるので、母と一緒に出かけることになった。タクシーで見たこともない所まで行った。

平屋の古い家が並び、狭い間隔でドアが並んでいる中、母は薄汚れたドアを、軽くノックした。ドアは静かに開いた。部屋の中で、昨日の女の人と、その後ろに僕と同じ年頃の男の子がいた。僕はその子を黙って見つめた。その子も黙って僕を見つめていた。着ているものが違うことは子





どもの目にも一目（ひとめ）で分かったが、何も言わなかった。

「昨日はありがとうございました」

女の人は小声でそう言うと、何度も上がるように母にすすめたが、母は上がり框（かまち）に腰をかけ、上がろうとはしなかった。

「子どもさんは、どうしやはんの」

母が穏やかな口ぶりで尋ねた。終始うつむき加減の女の人は、小さな声で、晩ご飯だけは作っておいて、それから出かけると言った。学校の行き帰りは一人でできるし心配ないとも付け加えた。

「帰りはタクシーで帰りよし。落ち着くまでは、それくらいは出したげるし」

母はそう言ったあと、顔を上げて後ろの男の子に話しかけた。

「お母さん、帰るの遅くなるけど、ちゃんと帰ってきやはるし。辛抱できるな？」

男の子は、コクンと首を縦に振った。

「そしたら、これ」

母は白い封筒と小さなケーキの箱を出し、うつむいたままの女の人の両手をとり、封筒をつかませた。箱は男の子の前に置いた。

「ちゃんと身なり整えて、もう少し血色ようなったら、顔立ちはええしお客さんはつくやろ。来週の日曜からでどうえ」

終始無言な女の人をあとに、母は僕の手を引いて外へ出た。出る間際に振り向くと、男の子はケーキの箱をじっと見つめていた

「今の子どもさん、あんたと同じ三年や。あんな子もいやはんのやで」

僕は返事することもなく、狭く舗装もされていない道を黙って手を引かれて歩いた。

「昨日はびっくりしたやろ。あの人な、面接の後、帰るにもおなかが減って動けへんて言わはんね。びっくりして、あるもん出したげて、それであそこで食べてはったんや」

昨日の出来事を、僕の顔を見ながら、母は何事でもないように話した。

「お母ちゃんもおなか減ったわ。なんか食べにいこか」

しばらく歩き、大通りに出たところで、小さなレストランがあった。

「ここにしよ。お子さまランチもあるて。デパートみたいやな」

中は小奇麗にテーブルが並べられ、愛想のいいコックさんが出迎えてくれた。

母はお子さまランチを注文しようとしたが、僕はチキンライスでいいと言った。母はもう一度お子さまランチをすすめたが、僕はチキンライスでいいと言った。

「いつもお子さまランチやないと嫌やて言うてんのに、おかしな子やな」
母は笑いながら、僕を見つめた。

次の日曜日から、その女の人が来た。初めての日なので早めに来て、お母さんからいろいろ説明を聞いていた。僕はホールでメンコやコマ回しの練習をしていた。ちょっと目が合ったときに、その女の人は僕に会釈してくれた。僕はびっくりして慌てて頭を下げたけど、お母さんは笑いながら、ちゃんと挨拶しなさいよといった。階段でご飯を食べていた時よりも顔色もよくなって、嬉しそうに話を聞いていた。

でも、この女の人がここで働いているときは、あの子は家で一人でお母さんの帰りを待っているんだな。お母さんが帰るまで寝ないで待っているんだろうか。学校があるから早く寝ないといけないし。寝るときは誰もいない家で一人で寝るんだったら寂しいなと思った。

しばらくたったある日曜日、二階の居間でテレビを見ながらお昼ご飯を待っていたら、お母さんが慌てて階段を上がってきた。
「お母ちゃんすぐ出るし。あんた、お留守番できるな」
バタバタと着替えを済ますと、
「やっぱりあんたもおいで。子どもの来るとこ違うけど、お母ちゃんいつ帰ってこれるか分からへんし。こういう時に限って、お父ちゃんは組合の旅行やし」
僕は、お留守番くらい出来るのにと思いながら、よそ行きに着替えようと脱ぎかけた。
「もう、そのままでええ。急ぐんやし」
半分笑いながら、着替えかけた僕の手を取って、階段を降り外へ出た。小走りで大通りに出ると、お母さんは大きな声を出して、手も大きく振りタクシーを呼びとめた。押し込まれるようにタクシーに乗ると、早口で行先を告げた。お母さんの顔は真っ赤だ。
着いたところは、見覚えのある場所だった。前にお母さんと一緒に、新しい人が来る前に家庭訪問に行ったところだ。僕と同じくらいの男の子もいた。話しはしなかったけど。
新しい人とは、一度だけ話したことがある。お店の人と話したらダメと言われていたけど、学校から帰り、家に入る前に向こうから「おかえり」と言ってくれた。名前は〝あやめ〟になるのって言ってた。お仕事での名前で、源氏名って言うと教えてくれた。
タクシーから降りると、パトロールカーの赤いランプが何台も見えた。救急車もいた。
出入り口が狭い間隔で並んだ家の中で、そこだけが扉が開いたままになっていた。白い服の人や警察の人が忙しく





出入りしていた。
「ご苦労さまです」
警察の人が敬礼しながら近づいてきた。
「この子を一人にしておくわけにもいかなくて、連れてきました」
お母さんは申し訳なさそうに頭を下げた。
「いいですよ。じゃあ、僕はこちらで待っててもらおうかな。すぐに終わるしね」
婦人警官のおねえさんが僕の肩を抱いて、パトカーの中へ入れてくれた。パトカーの中は初めてだったので、なんだかワクワクしながら車の中を見回していた。
お母さんはすぐに出て来た。泣いていた。警察の人に何度も頭を下げていた。
急に騒がしくなったと思ったら、家の中からストレッチャーが出て来た。大きな白い布がかぶせてある。そのあとにもう一台、今度は小さな布だった。周りからすすり泣きの声が聞こえた。
「身寄りもないとはいえ、小さな子まで」
「子ども一人残すわけにもなあ」
「こうなる前に誰かに相談くらい」
そんなささやき声が聞こえる中、救急車に運び込まれる二つの白い毛布の塊を見つめていた。
「そんなん、見んでもええ」
お母さんはいきなり僕の手を引っ張ると、急ぎ足で大通りに出て行った。大通りに出ると、前に来た時にチキンライスを食べたレストランがあった。家を出たのがお昼前だったのでおなかが減っていけたど、今日はそんなところでお昼ごはんを食べるとは言いにくかった。黙ってついていった。そのままタクシーに乗って家に帰った。
その日はお店は定休日だった。お父さんは夕方に帰ってくるので、お外に食べに行くことになっていた。近くの洋食堂で注文をして、出てくるまでの間お母さんとお父さんが小声で今日の話をしていた。
「あやめちゃん、そんなことに」
お父さんがびっくりして聞き返した。
「そやから気を付けやって言うてたのに」
うつむきながらお母さんが小声で続ける。
「遊びに来たはるお客さんなんやから、そんな人の言う事、真に受けたらあかんのに」
「本気にしとったんか」お父さんが驚いた顔で尋ね、そのあとで大きなため息をついた。
「ホンマにアホや。今度子どもにお父さんが出来るねんて、嬉しそうに言うてたわ。そんなことがあるはずないのに」
お母さんは、また目頭を押さえた。
「そんな時に、知らん女の人と温泉マークから出てきたんを見てしもたんやて」

「遊び人やから、そうなるの分かってなあかんのやけどな」
「もうやめとこ。子どもの前やし」
それっきりお母さんは黙ってしまった。
上等のお子さまランチがきた。けど、あまり美味しくなかった。最後のごはん、あの子は何を食べたのだろう。美味しいものだったらよかったのにな。お母さんがまた泣き出したので、僕も一緒に泣いてしまった。

晋 多可幸

しん　たかゆき

1950　京都市に生まれる。
立命館大学法学部卒業。
地元信用金庫、京都の繊維問屋を経て現在はＮＰＯ法人職員。
学校、職場すべて京都市内。京都を愛する京都市民。
三十代の頃に大阪文学学校で小説と詩をそれぞれ二年学ぶ。
それ以降は文芸活動なし。
六十歳を機に京都の随筆同人に参加するも、半年で脱退。
六十五歳を機に通信教育の文章教室を受講。現在も学習中。
受賞歴：なし。今回受賞が初めて。
ビギナーズラックと言われないように頑張らねば。

## 受賞の言葉

晋 多可幸

優秀賞ありがとうございます。小さな頃の記憶の断片を辿り、繋ぎ合わせて紡ぎ出した作品です。随筆は文章教室で学ぶ程度でしたが、井の中の蛙で終わってしまうのも残念だと、他流試合のつもりで応募してみました。思いがけない高い評価に驚いています。これからも応募を続け、発表までのワクワクドキドキを楽しみたいと思います。今回は表彰式がなく残念でした。来年以降の表彰式を目指して頑張っていきたいと思います。




# 作家集団「塊」プロ作家による
# 作品　添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします

**懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ！**

八覚正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）・都築隆広（文学界新人賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞／インターネット文芸新人賞）「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

| 詩 | | 小説 | |
|---|---|---|---|
| 1篇　A4用紙2枚以内 | 3000円 | 1篇 20枚まで | 7000円 |
| エッセイ | | 50枚まで | 10000円 |
| 1篇　5枚以内 | 4000円 | 100枚まで | 15000円 |
| 10枚以内 | 5000円 | 200枚まで | 20000円 |

●ご希望の作家と面談指導も可能です。
●ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

**作家集団「塊」事務局**
〒158-0083　東京都世田谷区奥沢7-15-13
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
asiawave@qk9.so-net.ne.jp

蘭藍子の遺作小説
注文はアジア文化社まで

1700円（税別／送料共）
御注文は折込葉書でアジア文化社まで

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

# じっちゃんとの追憶

高槻勇治

祖父は私が高等学校の教員として勤め出してから、しばらくの後に亡くなった。廣島の出身で、祖母と一緒になってから大阪へと移住してきたらしい。寡黙な人で周りの人たちとはあまり話さなかったが、孫である私とはなぜか波長が合い、よくしゃべった。

私は祖父のことを「じっちゃん」と呼んでいた。

祖父には幼い頃から、よく原爆の話を聞かされた。時おり涙と鼻水を拭いながら語るその内容が、あまりにも悲惨でむごたらしいものだったので、当時は恐怖し嫌悪さえしていたが、幾度となく繰り返し聞かされたので忘れようもなく、きっちりと脳裏に刻み込まれている。教壇に立つ身となって、そのことが貴重な時間を有していたのだと感ずる。

あれは——そう、祖父から初めて原爆の話を聞かされたのは、私が幼稚園児のときである。信じられないような衝撃的な話だったので、記憶に焼きついてしまったのだ。

祖父は独り言のように語っていたが、私が耳を塞いでいると「聞け！　聞いとくんや」と、その手を払いのけられた。当時は（なんでこんな話をボクにすんねん）と、心中不満だらけであった。まだ幼稚園児なのにだ。まるで将来、私が教壇に立つようになり祖父の原爆体験談をすることがわかっていたかのようだ。

私は毎年夏休み前に、必ず受け持ちクラスにそれを話している。

祖父が爆風で左目を負傷し、義眼であることもこのときに知った。その日、幼稚園から帰ってきた私は、祖父が炊事場で容器の中に入れた目玉を洗浄している場面に出くわし、腰を抜かさんばかりに驚いた。

「見られてしもうたかぁ……お前には見られとうなかったんやがのう」と少し悲しそうに言った祖父の言葉が、

「見たな～、見られたら仕方ないのぅ」と言っているように聞こえ、

「じ、じ、じっちゃんは人間ではなかったんやな」と言って逃げまどい、「このことは誰にも内緒にしとくから殺さんといてな」と必死に懇願したことをはっきりと覚えている。

そのときから事あるごとに、祖父の体験談を聞くことになった。

〈ゾンビ人間やヘドロ人間・元安川に蠢くフグ人間・針ねずみのようなガラス人間〉など、内容は筆舌に尽くし難いが、子どもの私にもわかるように話そうとしていることがわかった。

「なんの前触れもなく、いきなりピカを落としよったんじゃ。人間が人間にすることやないで！」と憤慨し「ええか勇坊、実際にあったことは本にも映像にも出来んのやぞ。ましてや映画みたいに、カッコええ音楽やら悲しい音楽なんてない。ただあるのは現実だけじゃ。そこにあるのは、臭いと呻き声と熱風だけや」と言っていた言葉を思い出す。

極限状況下で人間の赤裸々な態を垣間見、親類や友人をほとんど失い、当時許嫁であった女性まで亡くしたことに絶望し、自殺も考えたという。その許嫁だった女性は、しばらく生きていたが、看病空しく最後に「いろいろ世話になってしもうてありがとね。先に逝くけん」と蚊の鳴くような声でお礼を言って亡くなったらしい。祖父は一晩中泣き明かしたと言っていた。それからどのように生き抜いてきたかは想像を絶するものがあったに違いない。

「あ～死なんでよかったわい。こうして孫にも会えたんじゃから」と目を細めていた顔が目に浮かぶ。

確か私が小学五年生くらいの頃、祖父とこんな会話をしたことがある。

「じっちゃん、なんで人間て争いばっかりするんかなぁ」

「それはな、半分この気持ちがないからや」

「半分この気持ち？」

「こないだ勇坊が母ちゃんからもらったチョコレートを、半分じっちゃんにもくれようとしたやろ。じっちゃんは歯があかんから勇坊に食べてもろうたけどな……その気持ちが大事なんやで」

「うん」

「半分この精神があったら争いなんてなくなるし、起こるはずがないんじゃ」

「半分この精神か……」

私は改めて思う。いま各国の急務は、この半分この精神であると。これこそが人類平和の基本精神であろう。これが成されないのは、色々と理屈をつけてはいるが結局、自己中心的な欲望しかないからだ。

私が毎年欠かさずしていることがある。それは八月六日の午前八時十五分に必ず黙祷を捧げるということだ。

最初は祖父の真似事から始めたが、中学生くらいからは場所がどうであれ、その時間帯には必ず鎮魂する。それを

やり始めた頃、祖父が「ジングルベルのあとの、早くこいこいお正月では意味がないんやで」と言った言葉が頭に残っている。ようするに、毎年行われている式典のときだけの誓いではなく、日々反省の念と行動していくことが大事なんだということを言いたかったのだろう。だから私は八月十五日を〈終戦記念日〉とは言わず〈敗戦記念日〉だと言ってきた。このことは「戦争は終わっとらん！　いまでも原爆症で苦しむ人がおるんやぞ。いっぺん始めてしもうたら、もう元通りにはならんのや。そやからそうなる前になんとかせんとあかんのじゃわ」と言っていた祖父に同意した私の決め事である。

祖父には亡くなる間際まで心残りなことがあった。この話を最初に聞いたのは、私が小学校低学年の頃だと記憶する。この話をするときの祖父はいつも辛そうだった。

それは祖父が許嫁だった女性のところへ行く途中での出来事だったらしい。道を急ぐ祖父の足下からスッと子どもの手が伸びてきて、見ると顔が風船のように膨れ上がり、火傷と煤だらけになった少年が見上げていたという。

しきりに「水〜水〜」とせがむのだそうだ。

「あげたいんじゃが、じっちゃんもそんな水筒なんかもっとらんしよ。周り見てもほとんど瓦礫やし、わし道を通る人に、水もっとらんですかー！　水を少しもらえんですかー！　ゆうて叫ぶんやけど、誰も持っとらんわなぁ。みな虚ろな目をして通り過ぎていきよるんじゃわ」

話しながら畳にポタポタと涙を落とした。おそらくその少年と私を重ねて見ていたのだろうと思う。祖父はその少年をよく夢に見るのだと言っていた。夢の中で少年が、あの日と同じように水をせがんでいて、なぜか三〇メートルほど先に細い川が流れているらしい。そこまで必死に走って行き、両手で水をすくって少年の元へ帰るのだが、そのときには一滴の水も残っておらず、すでに少年は息絶えているのだと。

祖父が亡くなる二カ月前に私が病院へ見舞いに行ったときに、この夢を繰り返し頻繁に見るようになったと教えてくれた。おそらくこの事を知っていたのは、私だけだったと思われる。あれは祖父が亡くなる十日くらい前に、見舞いに行った私の母が、病院から帰ってくるなり不思議そうな顔をした。

「お義父さん、うわ言ゆうてはったわ」

「どんな？」

「それがなぁ、坊、水おいしいか、水おいしいかって……」

「！」

「なんか夢でも見てはったんやろな」

「そうか！　やったなじっちゃん！」

「なにがやのん？」





（そうかそうか、とうとうその子に水をあげることができたんやな……よかったなぁ、じっちゃん）

私の最後のお見舞いは、明日から四日間の出張という日だった。少々しんどそうに感じられたので、早々に切りあげ退室しようとしたときだ。スッと右手を伸ばし握手を求めてきた。いままでそんなことをした姿を見たことがなかったので驚いたが、その手をそっと握った。武骨であった手が皮と骨だけになって痩せ細ってはいたものの、びっくりするくらい強く握り返してきて、かすれたか細い声で「気をつけていってこいよ」とだけ言った。私はこのとき（あぁ、これは別れの握手やな）と悟った。

その翌日、出張先で祖父が亡くなったことを知らされた。私はホテルの浴室でシャワーを浴びながら号泣した。

お葬式が終わったその日、祖父の部屋に行くと、いつも鎮座していた座布団がまだかたずけられずにあった。私は主の居なくなった座布団に向かって

「みごとや、じっちゃん……」とつぶやくと

（なにを生意気な）という声を聞いたような気がした。

私はこれからも微力ではあるが、生徒たちに祖父から伝承された体験談を語り続けていこうと誓う。

「じっちゃん、おおきに」

**高槻勇治**

たかつき　ゆうじ

1986　関西外国語短期大学卒業

87　京都廣学館高等学校（前南京都高等学校）勤務

全生徒必修科目の少林寺拳法実技・学科を担当し現在に至る

## 受賞の言葉　高槻勇治

この度は優秀賞に選んでいただきまして誠に有難うございます。大変光栄に思います。また、手元へ通知が届いたのが八月六日であるということに私の作品内容を思えば、少なからず何かしらの因縁を感じます。生前、涙を流して語ってくれた祖父の想いが届いたのでしょうか。職業柄、三十年以上も前から教壇で生徒たちに話し続けてまいりましたが、それが文章化され文芸誌に掲載されたものを教材として活用できることは、非常に強みでありますしインパクトもあって、生徒たちに伝わる影響力も倍増することと思います。

まずは早速、祖父の墓前に報告しようと思います。

感謝！

合掌

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 社会批評 優秀賞

# 移動の自由と喜びを求めて

藤野高明

〈ニュースになった四件のホーム転落死〉

近年、大阪で視覚障害者のホームからの転落死が次々と起こった。

二〇一五年三月には阪急宝塚線・服部天神駅で六十代の全盲男性が、二〇一六年十月には近鉄大阪線・河内国分駅で四十代の全盲男性が、二〇一七年十月にはＪＲ阪和線・富木駅で五十代の全盲男性が、そして同年十二月には阪急京都線・上新庄駅で八十代の弱視の女性がいずれも誤ってホームから転落し、通過列車にはねられて死亡している。

これらの死亡事故については、当然のことながらそれぞれの状況に違いがあり、一律に論じる訳にはいかない。残念ながら視覚障害者の側にも不幸を招き寄せるなんらかの事情があった事も指摘しないわけにはいかない。例えば白杖を持っていなかったとか、体調不良や不注意などもあったかもしれない。そういう事を認めた上で指摘したい事がいくつかある。この四件の死亡事故に関して言えば駅の構造上の問題、ホーム上の駅員配置など指摘しなければならない負の共通点を絶対に見逃す訳にはいかないのである。

いずれの駅ホームにも、いかなる転落防止柵もなかった。国道交通省が転落防止のためのホームドアの設置を一つの目安として要請しているのは、一日の乗降客が十万人以上の駅である。この四つの駅はこの数字に適合しない。

二〇一七年十二月の統計でみると上新庄駅が最も多く約四万七千人、服部天神駅が約二万四千人、河内国分駅約八千人、そして富木駅は約四千人となっている。

十万人という数字はあくまでも一つの目安であって、この数字を基準にしてはならないと思う。転落死亡事故は人の目の少ない駅の方が起こりやすい。一旦落ちてしまうと、逃れようがなくなる場合が多い。

それからもう一つの共通点は、ホームに駅員がいなかったことである。

服部天神駅で事故死した彼は私の教え子でもあり、生徒の頃は弱視だったので私も彼のガイドで歩いたこともあった。その彼が視力の低下で全盲状態になっていたが、事故





にあったその夜は仕事帰りで、もちろん白杖も使っており彼には何の落ち度もないと思う。駅員はいなかった。

また、上新庄駅は大阪府立大阪北視覚支援学校の最寄り駅であり視覚に障害のある生徒、卒業生、職員らの利用も多いのに転落防止柵の設置は未だにない。女性が転落死した午前九時過ぎには駅員のホーム配置はなかった。

〈私のこと〉

私は、一九三八年十二月九州福岡市に生まれた。今、八十一歳になる。

戦後の一九四六年七月のことだが、戦争がのこした不発爆弾の暴発で両眼の視力と両の手先を失った。小学二年生の時である。二重の障害を理由に十三年間就学を認められなかったが、点字を唇で読むことを習得し二十歳の時、大阪市立盲学校（当時）の中学部二年生に入学を認められた。その後、大学の通信教育で教員免許状を取得し、母校の教壇で定年退職まで約三十年間、社会科教員として働いた。

またその間、全日本視覚障害者協議会（全視協）の役員、会長として視覚障害者の生活と権利、福祉の向上のために微力を尽くしてきた。

長年、白杖を携帯しての単独歩行（一人歩き）を続けてきたが、今はもうしない。家族、友人そして日常的にはほとんどがガイドヘルパーの力を借りて安全に楽しく移動し、社会参加を続けている。

〈ニュースにならなかった三度のホーム転落〉

私は二十代から六十歳位まで、単独歩行を基本にしてきた。視覚障害と両手先を失くしているのに、なぜ単独歩行をしてきたかと言うとそれは必要に迫られてのことである。しかし実際に単独歩行が出来るようになると、それには何ものにも代えがたい喜びと自由が感じられ、何よりも生きていく上での自立と自信に繋がっていったように思う。

ただ私の場合、手先を失っているので自在に杖を使って地面を叩き、足元を確認したりする事はできない。白杖は右腕の肘と体で挟むようにして携帯した。白杖を持っていると、こちらが視覚障害者であることをドライバーにも分かってもらえるし、壁や柱を感知することもできたので単独歩行にはやはり、欠かせない物であった。

単独歩行には自由も喜びもあったが、常に緊張感が伴い帰宅すると大きな疲れを感じた。だから目の見える人と一緒に歩けるときの、安心と楽しさは又、格別のものであった。

この私が人生で、三度鉄道ホームからの転落を経験している。落ちるまでは「私は落ちる事はない」と思っていた。もちろん何の根拠もない。「落ちるかもしれない」という不安もあった。単独歩行をする自分の気持ちの中に相反する二つの想いが同居していた。それは「決して落ちる事はないだろう」という自信と「落ちたら仕方ないや」という意味開き直りというか、覚悟のようなものだったと思

う。

その私がついにホームから落ちた。忘れもしない一九七三年五月、三十四歳の時である。当時の国鉄環状線・天満駅でのことだ。午前中の勤務を終え、午後から視覚障害者団体の全国大会に参加するため東京に行く予定で、次の大阪駅で友達と待ち合わせていた。時間も押していたので多少焦っていたことが悪かった。電車の前寄りに乗るつもりでホームへの階段を急ぎ足で昇り、入線してきた電車に向かって歩いた。その直後、足元からホームが消えた。グラリと体が傾き宙に投げ出された感覚だろうか。「あっ、しまった」とそういう思いが心をかすめた。何かで強かに顔面を打ったらしく、意識を失った。気がついたらホーム上の駅員の詰所のような所の椅子に腰かけていて机に寄りかかっていた。列車の前方に落ちたので運転手がそれを見て列車は動かなかった。近くにいたお客さん達が引き上げてくれた事を後で聞いた。

この時は救急車で病院に行き一旦帰宅したがその夜、高熱が出たことと、口の中の傷が意外にひどかった事もあって一週間入院した。

落ちた時の恐怖と、体が受けた苦痛は記憶からなかなか消える事はなかったが、仕事と日常生活が戻ってくると、そんな事は言っておられず単独歩行を続けた。その後も時を隔てて二度ホームから転落した。

地下鉄千日前線・今里駅での転落が今思い出しても、最も危険であった。列車の入り口と間違って連結部の間に落ちた。運転手には確認しにくい場所である。少しでも電車が動き出せば命はなかった。この時も乗客に助けてもらい、服を汚したまま先方に出かけ服の汚れを指摘されたが、ホーム転落の事は言わなかった。人に話すことは不愉快、かつ惨めであったからだ。

人生「最後」の転落は勤務校の最寄り駅、上新庄である。仕事を終えて、視覚障害者団体の会議に向かう途中の出来事だ。この時も急いでいた。電車の最後尾に乗るつもりで後寄りに寄り過ぎて待っていたらしく、電車の停車位置はかなり前の方であった。すり足で前の方に歩いた。点字誘導ブロックはまだなかった。電車の真後ろに落ちた。電車は逡巡する様に発車して行った。私にはそう感じられた。向かいホームで見ていた人が「電車が来るからホームの下に隠れて下さい」と叫ぶのが聞こえた。すぐにホームの下に体を隠した。この駅は急行、特急の通過駅になっている。電車が近づいて来た。スピードは落としていない。数十センチ目の前を驀進する電車、凄まじい轟音である。その様子が見えないだけに恐怖が数倍にもなる。火花が飛び散り舞い上がるような錯覚を感じた。例えようもない恐怖であった。それが過ぎると後続の通過電車がやって来た。稀有な実体験だが、もう二度とこんな経験はしたくない。





この様な、それこそ私にとっては「一大事」の出来事も何のニュースにもなっていない。私自身が話さなければ、大勢の人に知られることもない。それは誠に幸いなことに私が転落死しなかったからだ。それを考えると、視覚障害者の数多くのホーム転落死事故の周辺には数えきれない程のホーム転落があるはずだ。

想像して欲しい。視覚障害者が落ちる瞬間の心の奈落を！「恐怖」？　もちろんそれもある。しかし、心をよぎる最大の感情は筆舌に尽くし難い「惨めさ」と「絶望感」に他ならない。人が足場を失って落ちる姿は、主体としても客体としてもやはり「惨め」そのものである。

人として普通に生きようと努力し、移動の自由を求めて行動する視覚障害者にこのような、恐怖と惨めさを絶対に味わわせてはならないと強く思う昨今である。

**藤野高明**

ふじの　たかあき

1938　福岡生まれ

46　小学２年生の時不発弾で両眼両手を失う

71　日本大学卒業

72 ～ 2002 年まで大阪市立盲学校社会科教員として勤務

75 ～ 2001 年まで全日本視覚障害者協議会役員

1993　鳥居賞

2011　糸賀一雄記念賞

**受賞の言葉**

**藤野高明**

視覚障害者がホームから転落し電車と接触して、死に至るという事故は自分の体験をも省みて全くやり切れない気持ちになります。このような死亡事故は絶対に繰り返してはならず、人間の努力で必ず防げるものなのですから視覚障害者の努力は言うまでもなく、鉄道会社の思い切った転落防止策が必要だと思います。移動の自由と喜びを求めて本音を込めて書いたこの文章が、多くの方々に読まれることを心から望んでいます。

☆「文芸思潮」は下記の書店で店頭販売されております。

【東京】
ジュンク堂池袋本店
紀伊國屋書店新宿本店
【大阪】
MARUZEN&ジュンク堂梅田店
【インターネット】
アマゾン

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

# 小さな発見　野菜の祖先と出会う旅

本間 浩

野菜の原産地を訪れ、原種にふれる――

それは人類発祥の地に立って人の原点をさぐるのと同じで、いま広く出回っている野菜の発生の地辺をたずね、種の原種か近縁種を探し、手にし、その生い立ちから今日に至るまでの長い歴史と、馴化の経緯を偲ぶのが希求の願いであるだけに、達成できた時の喜びは筆舌を絶するものがある。全身がゆさぶられる。

その劇的な場面――

探し求める種の原種とおぼしい野の草は、消滅せずに、ひっそりと草むらの中にあって、原形を残していた。発見すると立ち止まり、知っている限りの知識の扉をひらき、ひらけ出し、ぶつけて、その正否を質し続ける。原種かな？それとも亜種かな？　或いは或いは、代を重ねて進化の途上の近縁種かな？　と慎重に手に触れ、目を細め、しげしげと観察する。鼻孔に近づけ、嗅ぐ。更にゆすり、指で弾く。ううん、どうかなどうかな？　首をひねり、ゆきつもどりつの観察と思考を反復し、ようやく至点にたどり着くと、最後の一幕は決め手としてそっと手を添え、引き抜く。土を払って口に入れる。試みに齧（かじ）る。噛み砕く。と野の草は、種の原種が持つ特有の香りを放つ。味もまた素朴だ。口いっぱいに、筋っぽく硬い口当たりで瑞々（みずみず）しさが広がる。食感を知る。おおっ、やっぱりこれはまぎれもなく原種だ、祖先だ、近縁種だ！　と納得し、おおっ！　と感動の言葉を発し、幾度も幾度も頷くのだった。その時、頬は紅潮するかあるいは逆に蒼白になっているはずだ。しばし――瞳は泪でくもり、原体はかすむ。時を待ちきれずにその場にしゃがみこみ、二度三度、おおっ！　おおっ！　と発し「あああっ、これがまぎれもなく原種だ！　祖先だ‼」と呟く。

時空を超えて、そこには一人の古代の人がいる。命をつなぐ野の草の菜を探して得た喜びに頬をゆるめ、急ぎ野の草を手いっぱいにとりこむと「今夜は、この草を食おう」と口走り、食を待つ家族のもとに、走ってゆく姿が描かれる。

現世にあるもう一人の人は、感動の一株を口にした後、探し得た野の草を大事に懐に抱み、急ぎホテルに戻るといっそうしげしげと見つめ直し、写真に収めたりした後で情景を記録し、もう一度、大事に大事に、丁寧に丁寧に口に





運び、味わう。

野の草は、現地にあっては、適切な環境に合ってか気が遠くなるほどの長い期間をかけて馴化し、やがて、人と鳥獣と風と潮によって各地に運ばれ、植栽され、改良育種され、見事に食品の蔬菜（そさい）になって今日に至っているのであった。その見事な生命力に感動し、賞賛すること、ひとしおだ。野の草は逞しい。その逞しさからの生命力の一片を人は受け、食し、生きる。「ありがとう」と声がもれる。

そう、野の草は自然界の母でもあるのだ。その母から、乳を授けられ、抱かれ、包まれて人は育てられているようなものだと直感しての私の声は、明るく笑顔に移る。

その無類の喜びを知っての野菜の原種探しの旅は、果てしなく広がり、続く。

そうはいっても、その機会を掴むことは容易ではない。そして、いつものことだが、事が成ると言葉に出して己に言い聞かす。「見つけて、よかったな！」

同行の老妻はそのような挙動を優しく見守ってくれていて「探し続けた昔の恋人にでも出会ったようなものですね。私との出会いと比べて、如何でしたか」と微笑みを浮かべながらいう。野の草と今日までを支えてくれた老妻に目をやり、ありがとうと首をたれるのだ。

二度三度四度、その回数、数えきれずだ。

こうした出会いの情景は日記帳に克明に記録してある。

記述の一部を再録すると。

＊１９９５年６月14日、イギリス・スコットランドのＬＵＮＤＩＮゴルフコースで、打ったボールが彼方に消えた。探す、探す。と、コースを横切るクリークの中にあった。水中の淡い緑の草のかげにある。手に取ろうとした時、「あっ、これクレソンだ！」と叫び、ボールを水中に残したままクレソンを引き抜くと、頬張った。野生の香りが脳天をしびれさせる。もちろんプレーを中断したまま、しばし、感動の時を過ごした。

＊２００８年１月８日、トルコ・エフクスの遺跡に足を踏み入れた時、そこに「ニンジン」の葉らしきものを見つけ、引き抜いた。鉛筆のように細い赤い根だが紛れもなくニンジンの原種であった。土の付いたままを口に入れた。特有の香りが広がる。古代に戻り、その場で、歴史の時にひたる。

＊２００５年６月15日、南米ペルーの山岳部で、素朴に栽培されていた「ジャガイモ」「トウモロコシ」「トマト」を現地の人の住まいの庭先で見つけた。ジャガイモもトマトも小粒で掌に数個も収まるほど小さかった。驚異の眼差しのうちで、突飛な口調と、指先と、笑顔で会話し、現物を手に入れた。宝物を捧げるような厳粛な手で持ち帰り、ホテルで食べた。固く、歯ごたえがし、超素朴な味を知った。トウモロコシの粒は色とりどりで、軸には幾粒もついていず、まるで芸術品のように映えていた。これらを主食品に

しているのだといっそう驚嘆し、帰国の際に持ち帰った。＊2013年1月28日、ポナペ島で野生の「タロ」を掘り取り。現地の住民の手を借り、焚火で蒸し、食した。美味しい云々を抜きにして、日本の里芋の親を知った。

＊2016年10月17日、オーストラリアのパースの海浜で、葉先がキラリと光る野生の草を見つけ、訊ねたら「バラフ」という。えっ?これがと驚愕し、手つかみでむしり採って食べた。塩辛い味が口いっぱいに広がる。後継種は「アイス・プラント」。

＊2012年11月10日、「ダイコン」の原種を、地中海を望むギリシャの崖の上で齧った。白い根は硬く、ピリッと辛い。今のダイコンに、この野生のダイコンの味はないと鮮明に覚えている。

＊2009年10月13日、中国・成都の市場で「ニンニク」の原種とおぼしき一粒種を見つける。真っ白で小指の先ほどの大きさだ。ニンニク特有の臭さはない。まるでノビルの鱗茎だ。らっきょかエシャレットのまがい物然ともしている。これがどう改良されて現在で回っている中国産のニンニクになったのかと首をひねった。

＊2011年7月7日、モロッコの市場でアフリカ産の「スイカ」を探した。以前、友人のI君によればアフリカの奥地のある種族は、砂漠の地で野生のスイカを細かく砕き、灰を混ぜると10～15分で薄黄色の濁った水がコップ一杯200CCの水が出来るので「西瓜があれば生きて行ける」と言い、日常生活にその水を使っていると教えてくれたことを思い出して、モロッコのマーケットにその種の黒いスイカをと探し廻ったが、残念ながら手に入れることは出来なかった。水の瓜がウォーターメロンになり、西瓜に通じ、化身した経緯に納得した。

＊2012年4月27日、多摩川の土手に自生している野生の「のらぼう」は、江戸時代、関東群代官伊奈忠宥（いなただおき）が見つけ、天明・天保の大飢饉の際に多くの人々を飢餓から救ったという言い伝えがある。さっそく探索に出かけたら、生えていたので採った。濃い緑の葉は「ふだん草」や「なばな」に似ていて、けっこうの味で食べれた。後で調べたらセイヨウアブラナ（洋種なばな）の系統に属しているアブラナ科の植物で、例外的に近縁他種や他品種と交雑して独自の原種になり、環境に馴化した種と判った。以来、地元に定着し、食卓にのせられている。　等々。

広く知られている野菜の原産地は、世界八大発祥説がある。日本原産の野菜はウド、セリ、フキ、ミツバ、ワサビなどの十種が数えられる程度に過ぎない。これらの全ては野の草として身近にあり、日ごろ容易に接しているのでよしとし、他をと目を向けると、世界各地に広がり、探索の旅は容易でない。

とはいえ、その旅はまた楽しい。訪ね歩くうちに、途中





で代を重ねて環境に順応し、馴化し、或いは交配されて今日の優れた品質の野菜になった種が殆んどで、その馴化、改良、交配などで近縁種に或いは新品種になっている現実を知ると、その過程にも興味が寄せられ、一層の深みにはまり込む。

世界の各地の街角のマーケットで目にも鮮やかな野菜・果物が、鮮やかに、整然と、綺麗に、或いは無造作に陳列されている。立ち止まってしげしげと眺め、手に取る。品名を尋ね、或いはメモに書いてもらう。どれもが初見参の品々だ。嬉しくなって、前後の見境もなく買ってしまう。ホテルで期待しながらかじり、或いは口にする。そのどれもが初体験になる。これまでの歳月を続けていた仕事と結び付き、その深さをまざまざと知らされる。発見は更に更にと興を引出し、深みへと誘う。果てしない希求だ。

かつて、人類の移動と自然環境の変化に頼っていた野菜の移動と伝播は、今の時代には瞬時になされている。世界で食に利用されている野菜の種類はどれほどあるか知れない。しかもそこから枝分かれした品種に至ってはその数知れずの無限の種だと思われる。

こうした野菜の原産の地を訪ね、そこで祖先に、或いは母に出会い、近縁種と親しく接することで、より深くそれぞれの実態とこれまでの変遷の歴史を知ると、ようやく同体になれるような嬉しい気持になる。出会って語り合い、一体化して『野菜人間』になる。

今日も目を光らせて、野に、畑に、更に更にと、街の店先に、新しく生まれた野菜の姿を追う。

**本間　浩**

ほんま　ひろし
昭和5年、新潟県で出生。新潟農林専門学校を経て明治大学を卒業。青果市場勤務、その後、青果物の流通関連業務に携わり、現在大寿青果流通コンサルタンツを経営。90歳。東京都在住。

**受賞の言葉**　**本間　浩**

拙作受賞の知らせを一番喜んでいるのが食卓にある野菜たちです。そう、それぞれが産した国の、地方の、田舎の訛った方言で「よかったね」と話しかけてきます。それが愚生には分かり、そこからまた会話がはずみます。野菜言葉で――。今日この頃、そのことが90歳の老躯の心を癒す秘術になっています。それをつれづれなるままにパソコンに打ち込み、一層の喜びに浸ります。ありがとうの言葉を添えて。また祖先との出会いの旅に向います。

第15回 文芸思潮 エッセイ賞 社会批評 優秀賞

# 「貯金これだけでよく平気だね」

柴田節子

二〇一二年五月、終活を始める三カ月前のことです。「貯金これだけでよく平気だねぇ」と姪に叫ばれました。介護施設で清掃員をしていた時です。姪とその子供たちが遊びに来る日曜日だというのに、テーブルの上にうっかり預金通帳を置いていたのです。その額がまさか現代人？にとって驚愕に価する少ない額だとは思ってもいませんでした。ですから私は、姪に知られてしまったと思ったその瞬間、老いさらばえた醜悪な裸体を人目に晒してしまったような、実は私は、年老いてから慌てて清廉潔白を装っているものの若い時分は大馬鹿者の乱暴な人間だった、ということがバレてしまったような恥ずかしさで、地獄に突き落とされたような気持ちになりました。

私は、大酒飲みの父親の遺伝子と、長い極貧生活からくる幸薄き連鎖という難があって結婚できなかった、もしくは結婚しなかった団塊の世代のはしりです。団塊の世代といえばポリシーがあって、バブルで荒稼ぎしてというイメージがあるでしょうが、私のように波打ち際に漂う、夢の島のチリ、アクタのような人間も沢山います（多分、万物は能力に差があるのですから絶対の公平なんてないのです）。で、私は、幾つもの仕事を経験して最晩年は野菜の選別作業中に力尽きて現役を終えるのですが、高額療養費制度を利用すれば簡単な手術での入退院なら十回は受けられるだろう蓄えであり、人が住める家もあるので、私としては先ず先ず頑張った方だろうと思っていました。

たしかに世間では、老後の必要経費（そもそも相当立派すぎる基盤の上に）、高額な年金プラス二千万円の貯金、としきりに報道されていますが、二〇一九年現在、そこに標準を設定していいのでしょうか。何かと問題の渦中にいる団塊の世代の私が言うのも憚（はばか）られますが、実際に数千万円、人によって億単位を必要としているのなら、その人のニーズがそもそも欲張りすぎるだろう、と私は思います。

日本は本当に難しい所にあって、災害も多くて、苦労の多い国です。それでも次々と困難を乗り越えて民主主義が熟成してきました。迂闊な大臣の発言や揚げ足取りの議員の発言で会議を空転させるようなことをしている場合ではありません。発展途上の民主主義は民意に媚びて安易な豊





かさをちらつかせ、仕事や生き甲斐というものを娯楽化させています。日本人は今後、貧すれば鈍する心の国民に成り下がっていくのでしょうか。人の物をふんだくるという行為が、これほどの国でなぜこんなにも起こるのでしょう。

姪に言われた一言（ひとこと）に動揺して、とりとめもなく一気に的外れかも知れないことを書いてしまいました。本当のところ、そんな偉そうなことを言ってる場合じゃないのです。私のフトコロは事実寂しい限りなのです。そういえば、自営業が破綻してから勤め始めた清掃の仕事の先々で、奇しくも、私の人生を総括するであろう同じ言葉を二人に言われたことがありました。「貧乏人は丈夫でいいなぁ」という一言です。傍目にも私の人生は私が考えていた以上に惨めなものだったのです。

「貧乏人は丈夫でいいなぁ」――。個室に入院していた高齢のお金持ちのご婦人からそう言われました。私の見た目が貧相なのか、それとも清掃員イコール貧乏人という印象でなのか分かりませんが、ベッド下に潜り込んで埃を掻き出している私の頭上で、屈託のない婦人の声がしました。後ずさりしながらベッド下から出て来ると婦人は清々（すがすが）しく微笑んでいました。貧乏人が皆丈夫かどうか分かりませんが、私は婦人の声と表情に嫌味の欠片（かけら）も感じませんでした。婦人は何も私になりたい訳ではなくて、単純に、元気でいいなぁと言いたかっただけなのです。誰が私なんかになりたいでしょう。明らかに不均衡な立場を交換するのなら、元気なだけが取り柄の還暦も過ぎた清掃員とじゃ余りにも割が合わないじゃないですか。言っときますが、私は清掃の仕事を馬鹿にしている訳ではありませんよ。そしてまた単純に、人の人生と取り替えたい気持ちもありませんよ。

もう一度言われた先は介護施設での一室でした。余命いくばくもないであろうご婦人が「貧乏人は……」と言ったのです。その時は私も相当くたびれていたので、もし、私が彼女と入れ替わったとして、私は私にどういう言葉を掛けたいであろう……と考えたのでした。

団塊の世代のはしりである私は二〇一二年から年金を貰うようになりました。爆発的に増える福祉の予算。こんな小さな国で、こんなに災害の多い国で、こんなに幸せの意味を忘れてしまった国で……申し訳ないです。

「よく平気だねぇ」と言われたその頃から私は、同世代もしくはそれ以上の年齢の人の死にざまに関心を持つようになりました。死にざまの情報が私の耳に届くということは即ち、ニュースとして取り上げられるような死に方をした人です。当時やそれ以前の、印象深い三つのニュースを憶えています。

当時、特別番組で死後三カ月経った独居老人の部屋を清掃する内容の放送がありました。遺留品を片付ける業者を

追ったものです。老人はまたしても私と同じ団塊の世代でした。大都会のど真ん中の住人です。家賃の未払い分を催促にきた大家さんが発見したようです。

私はあからさまに表現するのを堪えているだけで、あらゆる面で偏見の持ち主であることを人から知らされています。でも、同世代について感ずる分については多少のことは許されるだろうと思って書きますが、彼らの死と向き合う時、つい、彼らの死に至るまでの人生観、死生観がどこかで垣間見える筈だと思って厳しく探ってしまいます。

業者の方が部屋を片付けている時、小さな棚に取り残されているかも知れない書物、壁に貼られているポスター、入口付近でインタビューを受ける大家さんから漏れるだろう人物像、学生運動に参加していなかったか、結婚して落ち着いていたのか、など。結局、家賃の滞納や畳が腐れてしまって弱っている位の情報しか得られないのですが……。

オイ、何か言い残したいことはなかったのか！　太く短く生きようとした団塊の世代の居丈高な信条が、たいした成果も見せられないまま結果として、思い込みが激しいだけの自尊心を葬り去り、年金のお荷物でしかなくなってしまった人間として。詰まるところ、お荷物になってしまっている私として……。

番組を観ながら「家の中で死んだら、この部屋貸せなくなるね」と、独居老人の万年床から畳や床にまで付いてしまったシミを指差して姪が言いました。「私なら、もう駄目だと思ったら這ってでも外に出るな」と私は言いました。すると姪は私の決意を笑い飛ばして「それはそれで恥さらしでしょ」と言いました。姪は四十歳、団塊世代のジュニアです。我々のスッタモンダを見ているので、〝ゆとり世代〟とは違って堅実、賢明な性格です。

二十一世紀に入る前、定年退職したものの生活保護に頼らなければ生活出来ないと気付いた夫婦がいました。そのことを恥ずかしく思った夫婦は有り金はたいて、行ってみたかった観光名所を車で巡り歩きました。最後の街の、人の迷惑にならない丘の上に着いた時、夫婦は車にガスを引いて心中しました。

同じ頃、植物状態で寝たきりの妻を介護していた男性は、遂に体力の限界を感じ、解体されずに残っていた家の近くの焼場の窯の前に妻を運んで行きました。そして、妻を窯に入れて火をつけました。そして自らも炎の中に身を投じました。その凄まじい現場を最初に発見した人は、近くに停めてあった車から大音量でクラシック音楽が流れていたのを聞いたということです。

私よりひと回り、ふた回り年上の、大正、明治の人たちの耳も目も疑う生きざま、死にざまでした。

「何これー、貯金これだけでよく平気だね」と叫ばれた時、





私は心の底から驚き、恥ずかしく思い、顔面から火が噴き出て卒倒する思いでした。表面上は〝フムフム〟〝サテサテ〟といった顔をして平静を装っていましたが、内心、私は生まれて初めて鏡を覗いた類人猿のようにうろたえ、しどろもどろとなり、かじかんだ手が反射的にテーブルの上の通帳を握りしめた時、私は無機物と化していました。姪は重ねて「この年になるまでの無頓着が凄いわ～」と、けなしているのか褒めているのか分からない言葉を発すると、無様に立ちつくしている私をカラカラと気持ちよく笑い飛ばしました。

笑い飛ばされてから二カ月後、若い時の不摂生がたたって私は脳梗塞に倒れました。清掃の仕事も出来なくなってしまった私は、更なる節約をして小さな生命保険に入りました。これで葬式代は万全です。葬式より何より、それ以前に無様に寝たきりになってしまったらどうしようと考えた時、隣りのお金持ちの奥様との立ち話で「首でも括るよりないのかな」と話すと奥様に「あなた、そんなことしたら家の価値下がるのよ」と言われました。

ムム、なまじっかな物を所有したばかりに、不自由である。

それにつけても、世界を憂えていた（であろう）団塊の世代の諸氏。太く短く生きようとして年金の厄介になっている諸氏。

如何お過ごしですか？
笑われていませんか？
思い描いた世の中になっていますか？
民主主義も危ういです。どう思いますか？
かといって他の体制、どう思いますか？
人工知能、どう思いますか？

**柴田節子**
しばた　せつこ
1947　生誕
66 帯広北高等学校卒業
同年、印刷会社入社
74　地元新聞社に転職
86　写真植字業で独立
99　写真植字業廃業
2012　清掃業
以後、年金生活

**受賞の言葉**　**柴田節子**

「貯金これだけでよく平気だね」と姪に失笑されてから八年目の今年。高を括っていた私は姪の案ずる方向へと埋没してしまいました。予想だにしなかった認知機能の低下に見舞われたのです。しかし、その症状を食い止めるべくデイサービスに通い始めたその日、奇しくも受賞の知らせが届きました。本当に有難うございました。最高の喜びです。今後、書き溜めた作品の下書きの清書に励んで参ります。